

長万部町 豊野3遺跡

— 北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(長万部町道国縫川向線) —

令和5年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

長万部町 豊野3遺跡

— 北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(長万部町道国縫川向線) —

令和5年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡の立地 S-N



遺跡遠景 E-W



遺物出土状況 E→W



基本土層 (D11区) S→N



P.S-1 検出状況 SE→NW



石鏃出土状況 W→E



つまみ付きナイフ フレイク出土状況 E→W

例 言

1. 本書は、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構が行う北海道新幹線建設事業(長万部町道国縫川向線)に伴い、公益財団法人 北海道埋蔵文化財センターが令和5(2023)年度に実施した、長万部町 豊野3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書『長万部町 豊野3遺跡』北埋調報378)である。
2. 令和6(2024)年に当センターが刊行した『調査年報36』で報告した内容よりも、本報告書記載の内容が優先する。
3. 本書の執筆は、末光正卓・吉田裕史洋が分担し文責は各項目の末尾に括弧で記した。編集は吉田が行った。
4. 現場の写真と報告書掲載遺物は吉田が撮影した。
5. 黒曜石製石器の産地推定は株式会社パレオ・ラボ、火山灰同定はアースサイエンス株式会社に依頼した。
6. 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各氏から御指導・御協力をいただいた。

(所属は当時・順不同・敬称略)

北海道教育庁生涯学習推進局 文化財・博物館課
長万部町教育委員会 八雲町教育委員会 今金町教育委員会
長万部町教育委員会 小野昌文
八雲町教育委員会 大谷茂之
今金町教育委員会 宮本雅通
べやんフォト 田邊朋宏

記号等の説明

1. 確認した遺構は下記の略号を用い、連番を付し本文及び図表中に用いた。

PS : 土器集中 FC : フレイク集中

2. 遺構図面等の縮尺

土器集中 : 40 分の 1 フレイク集中 : 40 分の 1

地形測量図・遺構位置図 : 原則 500 分の 1

各図にスケールと方位記号 (座標北) を付した。

遺構平面図の「+ (十字) と文字列」はグリッドの名称である。

遺構平面図等の「・ (ドット) と数値」はその地点の標高 (m) を示す。

3. 遺物図の縮尺は次のとおりでスケールを付した。

復原土器 : 4 分の 1 破片土器 : 3 分の 1

剥片石器 : 2 分の 1 礫石器 : 3 分の 1

石製品 : 3 分の 1

4. 本文及び図表中で遺構の規模は次の要領で表記した。(丸括弧) は一部破壊されているもの等について、現存する計測値を示す。

平面的な遺構 : 範囲の長径×短径 / 最大深・厚 (m)

目次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
図目次	
表目次	
写真図版目次	

I章 結 言

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	1
(1) 北海道新幹線建設事業	
(2) 包蔵地試掘調査の概要	
(3) 発掘調査の経過	
4. 調査成果の概要	3

II章 遺跡の立地と周辺環境

1. 立地と環境	5
2. 遺跡の周辺環境	5
3. 地名	5
4. 旧地形図の読図	6
(1) 明治年間の遺跡の周辺	
(2) 大正～昭和(戦前)年間の遺跡の周辺	
5. アイヌ民族の伝説が残る場所	6
(1) 黒岩(クロイワ)	
(2) ネットヌサ(ネツノシヤ・ネツニシヤ)(和名:寄木塚 ヨリキツカ)	
6. 長万部町内の遺跡	12

III章 調査の概要

1. 発掘区の設定	15
2. 基本土層	15
3. 調査の方法	20
4. 整理の方法	20
(1) 一次整理の方法	
(2) 二次整理の方法	
5. 写真撮影	24
6. 遺物の分類基準	24

IV章 遺構と出土遺物

1. 遺構の概要	27
2. 土器集中	27
PS-1 PS-2 PS-3	

3. フレイク集中	27
FC-1	
4. 遺構出土の遺物	27
(1) 復原土器	
(2) 破片土器	
V章 包含層出土の遺物	
1. 遺物の概要	33
2. 土器	33
(1) 破片土器	
3. 石器	36
(1) 剥片石器	
(2) 礫石器・石製品	
VI章 結 語	
1. 黒曜石の原産地について	43
2. 寛文9年蝦夷の乱(シャクシャインの戦い)での長万部(追記)	43
付篇	
1. 豊野3遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	53
2. 火山灰同定(豊野3遺跡)	57
写真図版	
引用参考文献	
報告書抄録	

目 次

図1	遺跡の位置	2	図10	範囲杭山柱状図(2)	21
図2	表土除去後地形測量図・基本土層実測位置	4	図11	基本土層図・東西方向グリッド杭山柱状図	22
図3	遺跡周辺の状況(1)明治年間	7	図12	南北方向グリッド杭山柱状図	23
図4	遺跡周辺の状況(2)大正～昭和(戦前)年間	8	図13	最終面地形測量図・遺構位置図	28
図5	東西緩夷山川地理取調圖四(長万部町の部分) ネドメサの位置(明治年間)	9	図14	遺物集中	29
図6	長万部町内の遺跡 長万部町全圖 国縫校掲載の地図	11	図15	遺構・包含層出土石器	30
図7	遺跡現況図(工事図面)	16	図16	遺物出土分布図(1)	34
図8	グリッド設定図	18	図17	遺物出土分布図(2)	35
図9	範囲杭山柱状図(1)	19	図18	包含層出土石器(1)	37
			図19	包含層出土石器(2)	38

表 目 次

表1	遺構数一覧表	4	表13	遺物集中一覧表	31
表2	遺物点数一覧表	4	表14	遺構出土石器点数表	31
表3	長万部町内の遺跡一覧表	13・14	表15	遺構出土石器点数表	32
表4	発掘調査基準点一覧表	17	表16	PS-1出土復原石器観察表	32
表5	基本土層	17	表17	遺構出土破片石器観察表	32
表6	土器時期分類基準	25	表18	包含層出土石器点数表	39
表7	土器部位分類基準	25	表19	包含層出土石器点数表	40
表8	土器残存状態分類基準	25	表20	包含層出土破片石器観察表	41
表9	石器器種分類基準	25	表21	包含層出土石器観察表	42
表10	石器残存状態分類基準	25	表22	黒曜石原産地分析試料観察表	43
表11	岩石分類体系表	26	表23	寛文9年蝦夷の乱の文献対比	52
表12	岩石(石材)の略号	26			

写真図版目次

口絵 1

遺跡の立地 S-N

遺跡遠景 E-W

口絵 2

遺物出土状況 E-W

基本土層 (D11) 区 S-N

P S-1 検出状況 SE-NW

石畿出土状況 W-E

つまみ付きナイフ フレイク出土状況 E-W

図版 1 調査前状況

俯瞰

E-W

図版 2 調査区と基本土層

調査区全景

俯瞰

基本土層 (1N 杭南西面) SW-NE

基本土層 (10N 杭南西面) SW-NW

基本土層 (D11) 区 S-N

図版 3 遺構の調査

P S-1 検出状況 SE-NW

P S-3 検出状況 NE-SW

P S-2 検出状況 SW-NE

P S-2 検出状況 NW-SE

F C-1 検出作業 SW-NE

図版 4 包含層の調査

調査状況 S-N

調査状況 NW-SE

遺物検出作業 NE-SW

調査状況 W-E

調査状況 E-W

図版 5 包含層遺物出土状況

土器 (D9) 区 NW-SE

石畿 (D9) 区 N-S

石畿 (D9) 区 NE-SW

つまみ付きナイフ (D9) 区 SW-NE

つまみ付きナイフ (D9) 区 SW-NE

つまみ付きナイフ (D9) 区 NW-SE

つまみ付きナイフ (D11) 区 E-W

スクレイパー (D9) 区 E-W

スクレイパー (D11) 区 SE-NW

図版 6 包含層残存状況確認調査

調査状況 W-E

土層断面 (14S) 杭 W-E

土層断面 (15S) 杭 S-N

土層断面 (16S) 杭 W-E

土層断面 (17N) 杭 S-N

土層断面 (D19) 杭 W-E

図版 7 調査完了状況と一次整理作業

包含層残存状況確認調査完了状況 俯瞰

調査完了状況 俯瞰

調査完了状況 NW-SE

遺物水洗作業

図版 8

遺構・包含層出土土器

遺構・包含層出土土器 (1)

図版 9

遺構・包含層出土土器 (2)

黒曜石原産地分析試料

I 章 緒 言

1. 調査要項

事業名：北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財調査
委託者：独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 北海道新幹線建設局
調査期間：令和5年4月1日～令和6年3月31日(現地調査 令和5年5月8日～6月30日)
遺跡名：豊野3遺跡(B-17-15)
所在地：山越郡長万部町豊野123-1、124
調査面積：300㎡

2. 調査体制

令和5(2023)年度

第1調査部長 鈴木 信(常務理事 兼務)

第2調査部長 村田 大

第2調査部第1調査課 課長 鈴木宏行

主査 末光正卓(発掘担当者)

主査 吉田裕史洋(発掘担当者)

3. 調査の経緯

(1)北海道新幹線建設事業

昭和48(1973)年に定められた整備新幹線の一つである北海道新幹線の建設事業は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構(以下、JRTT)が進めており、平成28(2016)年3月26日、新青森駅～新函館北斗駅間の148.8kmが開業した。同区間の青函トンネル(53.85km)部分を含む本州側の新中小国信号所～北海道木古内駅間は在来線である海峽線との共用区間で、同駅～新函館北斗駅までは新幹線独自の新路線である。この木古内駅より北側の新路線建設に伴い、平成21～23(2009～2011)年度に当センターが調査した遺跡を列記する。丸括弧内は工事区間で「STA」は測点、「Km」は新青森起点からの距離である。

木古内町・木古内2遺跡(STA.1139 付近)：北埋調報278・293
・木古内遺跡(114K200～400m 付近)：北埋調報304
・蛇内2遺跡(116K000～100m 付近)：北埋調報281・292
・大平遺跡(115K100～200m 付近)：北埋調報280・321・328
・大平4遺跡(115K300～400m 付近)：北埋調報280・292
北斗市・押上1遺跡(STA.1376～1377)：北埋調報312

また、上記以外で本事業関連により調査した遺跡を記す。

木古内町 新道4遺跡(111K423.313～483.313m 付近)：平成25(2013)年度調査 北埋調報320
福島町 館崎遺跡(新幹線信号通信機器室)：平成21～23(2009～2011)年度調査 北埋調報333
知内町 湯の里遺跡(101K000m 付近)：平成28(2016)年度調査 北埋調報334
長万部町 豊野4遺跡(225K560～580m)：令和2(2020)年度調査 北埋調報366

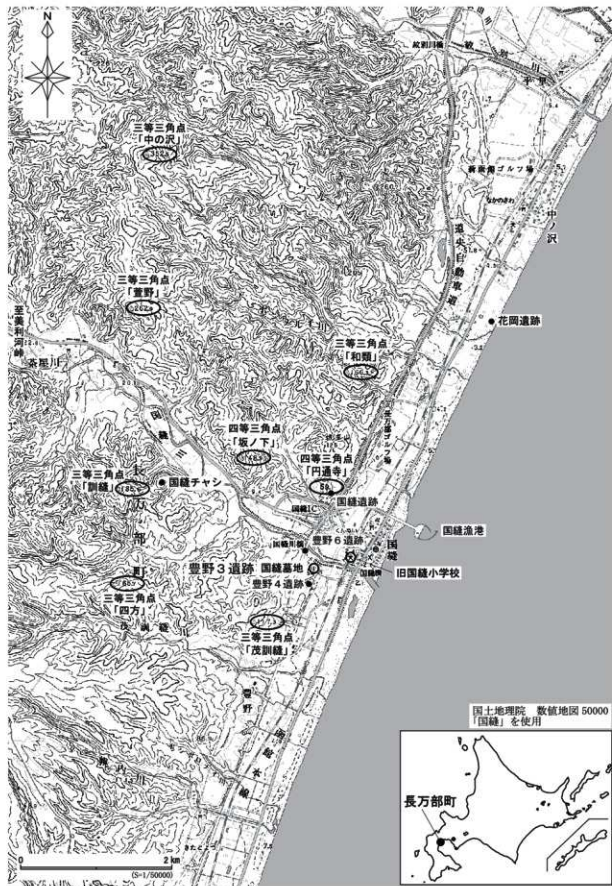


図1 遺跡の位置

長万部町 共立2遺跡(旧共立小学校)：令和2(2020)年度調査 北理調報 366

「立岩トンネル工事」(長さ 17,035m)の発生土受入地として提供された長万部町有地

令和5(2023)年現在、新函館北斗駅から札幌駅までの路線(約211.5km)が建設中で、開業予定は令和12(2030)年度末であるが、建築資材の高騰などの要因で遅延が懸念されている。開業すると札幌までは「E956型」アルファ・エックス(ALFA-X)が最高時速360kmで営業運転される予定で、さらに北海道整備新幹線は旭川まで計画されている。札幌までの区間の駅は新八雲(仮称)、長万部、倶知安、新小樽(仮称)で、長万部駅と倶知安駅は在来線のものに併設され、新八雲駅と新小樽駅は新規に開業する。線路は現在の函館本線が走る山間部のルート(北回りルート)で、17か所あるトンネルの合計距離が168.9kmと全路線の約80%を占める。今回調査した豊野3遺跡は、JR函館本線国縫駅から南西方向に直線で800m、国縫墓地に位置する。この墓地の南側すぐに北海道新幹線の国縫トンネルの北側出口がある。国縫トンネルは延長1,340m(224Km310～225Km650m)で、トンネルを出てすぐに長万部町道である「国縫川向線」と立体交差する(225Km731m～744m付近 工事図面(図7)上で計測)。この部分で安全な高さを確保するため、町道の改良工事を行うこととなり、これに伴い豊野3遺跡の発掘調査が必要となった。

(2) 包蔵地試掘調査の概要

北海道教育委員会(以下、道教委)による包蔵地試掘調査が令和4(2022)年12月2日に行われた。試掘坑のうち2か所から縄文時代早期の土器と剥片が出土し、遺物包含層が良好に残っていることが確認され、300㎡について発掘調査が必要と判断された。

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は令和5(2023)年度の5・6月に第2調査部第1調査課が担当した。国縫墓地の緑辺を発掘することから、4月6日に長万部町教育委員会、JRTTとともに国縫振興会館にて、地元住民への説明会を開いた。4月中旬に準備工に着手し、現場事務所の設置、重機による表土除去作業等を実施し、大型連休明けの5月11日から、人力での発掘調査を開始した。現場調査事務所は旧国縫小学校の運動場にかまえ、現場へは車両で移動した。発掘調査は6月末に完了し、報告書作成のための二次整理作業を11月から開始し、同年度末に本報告書(北理調報378)を刊行する。

4. 調査成果の概要(図13 表1・2)

東西に細長い形状の調査区で、西端には国縫墓地の象徴といえる3本の杉木がある。その付近は地山まで攪乱されていた。地形は山よりの西側が高く海方向の東側へと低くなり、かつ東側部分は町道がある南方向へ落ちる急な崖であった。遺物包含層の残存状態が良い部分は調査区の中央付近から西側であった。遺構は土器集中3か所、フレイク集中1か所を調査した。これら遺物集中は、多量に密集している状況というより、周囲の包含層と比して遺物が多い範囲を記録したものである。土器集中とフレイク集中は調査区の中央よりやや西側に位置し、PS-1～3は縄文時代早期後半で、FC-1からは頁岩製のフレイクが多数出土した。

遺物は、土器704点、石器2,390点が出土した。土器は多くがI群b類の東釧路式系で、少量、I群a類の沈線文が施されたものや、II群b類の円筒土器下層式がみられる。剥片石器は、石鏃、石槍・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパーで頁岩製が多い。礫石器は、たたき石、すり石、台石が少量出土した。安山岩製が多く、レキ(自然礫)も同様である。本遺跡の主たる時期は縄文時代早期後半で、石器の多くもこの同時期のものと判断する。

(吉田裕史)

表1 遺構数一覧表

種別	記号	数	名称
土器集中	P S	3か所	P S - 1・2・3
フレイク集中	F C	1か所	F C - 1

表2 遺物点数一覧表

出土地点 / 遺物種別	土器	石器	合計	備考
遺構	59	110	169	
包含層	645	2,280	2,925	
合計	704	2,390	3,094	

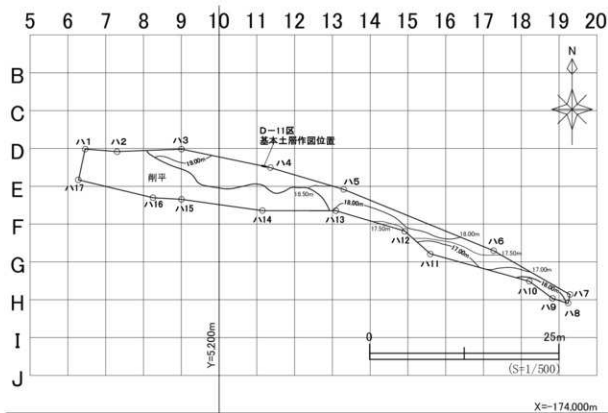


図2 表土除去後地形測量図・基本土層実測位置

Ⅱ章 遺跡の立地と周辺環境

1. 立地と環境 (図1・6)

北海道山越郡長万部町は渡島管内の最北端、黒松内低地帯の太平洋側に位置する。この低地帯は長万部町から黒松内町を経て寿都町までの帯状の範囲で、道南地域の北側の境界といわれる。内浦湾(噴火湾)に面する長万部町は、東側は胆振管内の虻田郡豊浦町、北側は後志管内の寿都郡黒松内町と島牧郡島牧村、西側を檜山管内の瀬棚郡今金町、南側を二世郡八雲町と接する。これらの行政界は、豊浦町とはJ R室蘭本線小幌駅と礼文華峠で、黒松内町とは小幌海岸沿いの東西に長い山の連なりと、静狩峠(標高238m)から写万部山(499.1m)を経てJ R函館本線旧蔵岱駅付近までの山間部、同地点から黒松内岳の南側を西方向に続く山々である。島牧村と接する部分は狭く、町内最高峰の長万部岳(972.6m)の北側付近、最高標高819mの無名の頂部を含む山稜である。今金町とは、長万部岳、丸山(674.1m)、美利河峠(標高139m)、坊主山(544.1m)、ルコツ岳(532.1m)の頂の連なりで分かたれ、八雲町との境界はルコツ川である。

2. 遺跡の周辺環境 (図1・7 口絵1 図版1)

豊野地区は長万部町内の南部、国縫川の右岸からポンポロナイ川の左岸までの範囲で、北側は国縫地区、南側は豊津地区と接する。河川は上記に加え、茂訓縫川、無名の沢が噴火湾に流れ込んでいる。砂浜の海岸線から西側の内陸部へ1km程度の範囲には低地が広がり、旧河道の名残の沼がみられる。そこからは標高20m程度の比較的平坦な台地で豊野3遺跡はここに立地する。さらに西側は、標高が100mを越える山間部に続く。最も大きな河川は流路延長14.4kmの2級河川、国縫川である。今金町との境界付近、美利河峠の手前に源流部がある。名称が記された支流は茶屋川、上国縫川、萱の川、パンケイ川、大尻川である。豊野3遺跡は三等三角点「茂国縫」(117.3m)の頂部から北東にのびる尾根の標高20m付近に立地する。現況は国縫墓地で国縫川の右岸である。ここは縄文時代の石蔵が出土したことが知られおり、墓地の付属施設である三宝地藏堂という小屋に遺跡であることが掲示されていたが、新幹線建設工事のため現在この建物は撤去された。また、令和2(2020)年に調査した豊野4遺跡は、本道跡から南へ直線距離で170m、北海道新幹線の国縫トンネル上に位置する(北理調報366)。また、豊野3遺跡から北側へ約270mの山間部には、北海道縦貫自動車道建設で平成11(1999)年に当センターが調査した豊野6遺跡がある(北理調報143)。また、国縫川の河口は寛文9(1667)年蝦夷の乱(シャクシャインの戦い)の古戦場であったと伝える石碑が、旧国縫小学校の運動場の南側にある。右岸には標高185.6mの三等三角点「訓縫」の山頂がみられ、これから東に続く尾根上に国縫チャシがあるとされている。

3. 地名

町名の「長万部」はアイヌ語起源である。雪解けの季節に、写万部山の山体の残雪の形が魚の鱗(カレイ)の形状を表し、その頃が漁をする絶好の時期であるとの言い伝えに由来するといわれる。一方、「オ・シャム・ベツ」すなわち「河尻・横になる・川」とも解される。河尻が横になるとは、河口近くで流れが海岸と平行になることで、これが町名の由来と考える。この成因は海岸砂丘の発達で河川の流れを阻むためと考えられる。郡名の「山越」(ヤマコシ・ヤムコシ)はアイヌ語での解釈のみら

れるが、おそらく山間部を越えて日本海側に至る交通路がある地域を呼称した和名であろう。具体的な峠道は、八雲一熊石間(雲石峠越)、国縫一せたな間(美利河峠越)、長万部一寿都間(黒松内経由)である。遺跡名「豊野」は和名で、漢字が示す豊かな野という意味で付けられた行政名である。豊野の旧行政区は「茂訓縫」で、さらに古い字名の「国縫川向」、「モクヌスイ」等が整理統合されたもので、遺跡へ至る町道は「国縫川向線」で旧字名を残している。地名「国縫」はアイヌ語で、「クンネ・ナイ」すなわち「黒い川」の意味で、黒色の原因は川砂に含まれる砂鉄であろう。現に長万部から国縫、八雲の海岸は砂鉄鉱床が豊富なことが知られており、昭和30～40年代には砂鉄の採掘が最盛期であった。一方、アイヌの伝説での解釈もある。昔、国縫川上流の山奥に洞窟があり、ここを隠れ家としていた「フリカムイ」という巨鳥が洞窟から飛び出して、その翼を凶暴な羽音とともに雨雲のように天に広げ、強風を巻き起こし、自然を荒らし住人に被害を与えた。この時空も川も暗くなったので「クンネ(暗い)・ナイ(川)」と伝えられている。フリカムイが暴れるアイヌの昔話は、風災害を描写したもので、道内の各地にある。

4. 旧地形図の読図

(1) 明治年間の遺跡の周辺(図3)

図3は明治29(1896)年の「黒岩」を使用した。その図によると、豊野3遺跡は国縫川の右岸、標高20m付近の段丘に位置する。国縫川左岸には、現在の坊主山(標高125m)の南側から海岸へ至る直線的な道路があり、集落は、坊主山の麓、道路を挟んだ川の近く、海浜の3か所にみられる。紋別川の流域から「ルコッチ」(現在のルコツ川)までの海岸沿いの低地は、広葉樹、草地、湿地の地図記号があり、国縫川とモクヌスイ(現在の茂訓縫川)は海岸で一つの流れになり内浦湾に流れ込んでいた。国縫川を上流に向かうと、下流部は右岸に1本と左岸に無名の沢が8本描かれ、さらに上流の両岸には多くの支流が名称とともに記されている。これは国縫川沿いの道が、砂金地(今金町 美利河)に至る重要な道であったことを示唆している。

(2) 大正～昭和(戦前)年間の遺跡の周辺(図4)

図4は大正6(1917)年測圖、昭和6(1931)年鉄道補入の「訓縫」を使用した。その図によると、昭和4(1929)年の瀬棚線全線の鉄道敷設を機に、同年大日本帝国陸地測量部により作成された地形図で、海岸沿いには明治36(1903)年に開通した函館本線がある。国縫川の右岸の地名は「川向」で、現在も国縫墓地に至る町道は「国縫川向線」の名称である(図7)。国縫川は下流部で屈曲がみられ、現在の直線的な流れとは異なる。さらに河口部分は茂訓縫川と分かれている。豊野3遺跡が位置する段丘にはすでに墓地の地図記号があり、破線表記の山道と点在する家がみられる。山道は海岸と平行する段丘を縦断し、茂訓縫川沿いまで続く。同河川は海岸近くで屈曲して北流し海に注いでいる。さらに南の山間部には「種馬所」がある。これは、日露戦争後に軍馬の品質向上を目的に、明治42(1909)年に置かれた国(馬政局)の施設、「長万部(胆振)種馬所」である。国縫駅の北東には「坊主山」と寺院の地図記号がある。一方、国縫川の上流部分は、下流から「イヌシリ」、「パンケイ」、「萱野」、「茶屋川」の地名がみられ、萱野地区は平坦地が開け、学校や神社、「茶屋川駅」があり、その下流の右岸の「パンケイ」にも広い平坦地がある。

5. アイヌ民族の伝説が残る場所

遺跡周辺には「黒岩」、「ネドヌサ」というアイヌ民族の伝説が残る場所がある。寛政3(1791)年に道南を旅した菅江真澄が記した「えぞのてぶり」(『菅江真澄遊覧記』(2)1966)と、安政2(1855)年

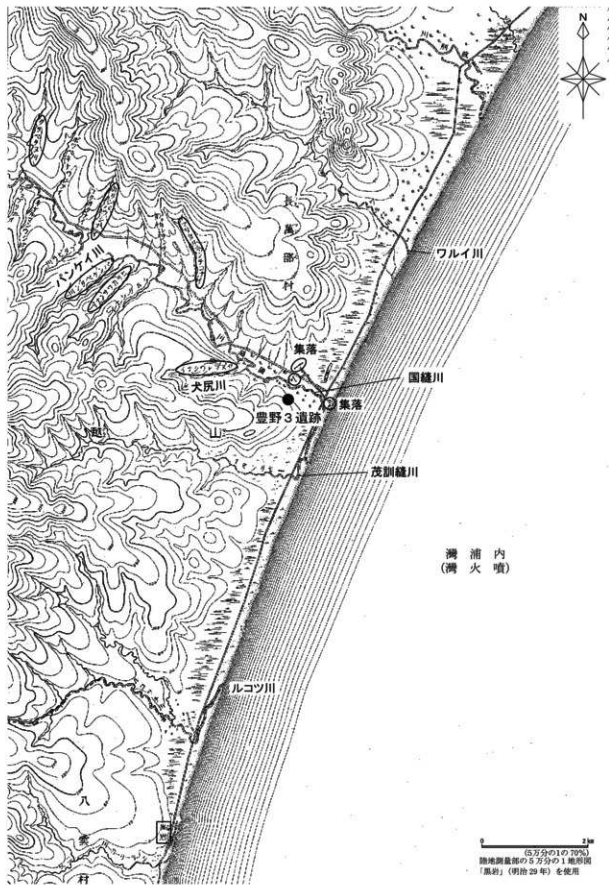


図3 遺跡周辺の状況(1)明治年間

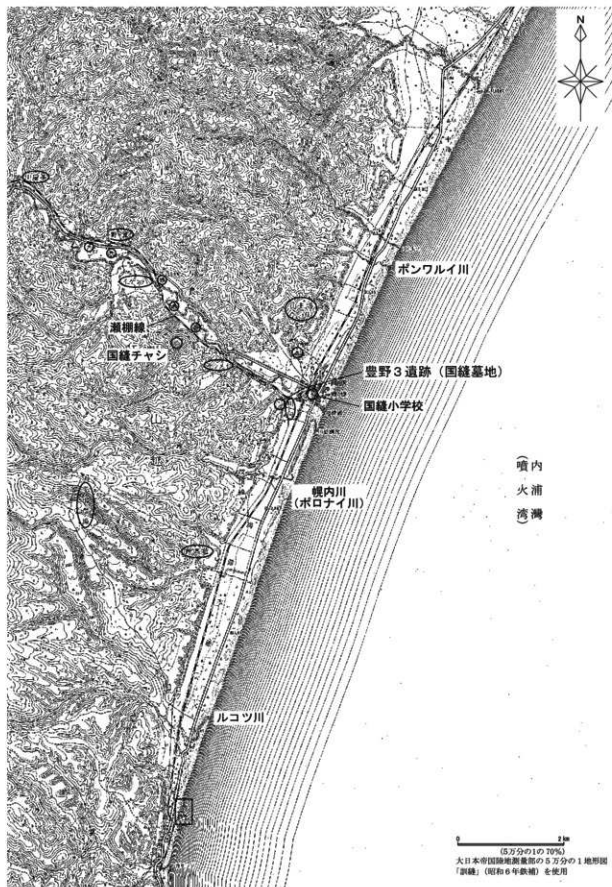


図4 遺跡周辺の状況(2)大正～昭和(戦前)年間



図5 東西蝦夷山川地理取調圖四（長万部町の部分）

に松浦武四郎が記録した「東西蝦夷山川地理取調圖 四」(図5)に記載がある。

(1) 黒岩(クロイワ)(図3・4・5)

現在の八雲町黒岩地区で、地名の由来となった「黒岩の奇岩」である。「えぞのてぶり」によると「ルクチという磯に小川がある。ここを和人の言葉で黒岩とって、大きな岩が立ちならび、その間ごとにイナヲがさしてあった。そのむかし、遠い村(トキマコタン)のアイヌたちが軍勢(サントミ)を出し、たくさんの船に乗ってきて、このコタンを撃とうと段々近づくと、このルクチの黒岩の姿がたくさんのアイヌが立並んだように見えたので、遠い村のアイヌたちはこれに驚き恐れて、我先にと舟を漕いで逃げ退いた。これはこのコタンのアイヌを守っておられる石神(シヌマ・カムイ)であるといつて、現在までこのように敬いまつり、イナヲを捧げている。」という(223頁)。また、江戸時代末期の探検家の松浦武四郎は「竹四郎廻浦日記 下」に「クン子(ネ)シヌマ」とあり、「此所に大なる黒き岩有。依てまた黒岩共云也。」と記している。大正年間にはこの岩に龍神信仰が生まれ、祠を祀ったが波で損傷するので、御神体を近くの黒岩恵比寿神社に移したが、昭和48(1973)年に祠を再建し、赤い鳥居と橋も造られ、現在みられる景色となった。黒岩奇岩の地質は、新第三紀中新世に八雲層「硬質頁岩部層」が海成堆積した時に、局所的な火成活動により生じたもので、八雲層「火山角礫岩部層」と呼ばれ、火山角礫岩、凝灰角礫岩、凝灰質砂岩から構成され(石田 1983)、岩全体は流紋岩質の水砕破砕岩(ハイアロクロスタイト)と説明される。

(2) ネドヌサ(ネツノシヤ・ネツニシヤ) (和名: 寄木塚 ヨリキツカ)(図5・6)

現在の長万部町旭浜地区、室蘭本線旭浜駅(平成18(2006)年廃止)付近で、オタモイ川河口付近の海岸と考えられる。明治年間の地形図(図5右下)に「ネドヌサ」の位置が記され、これはアイヌ語の「ネツ・ヌサ」、すなわち「流木の・祭壇」で、ネツノシヤやネツニシヤはこれが転訛した呼称と考えられる。菅江真澄の記録によると「長万部の海岸を行くうちに、流木をたかく積みあげたところがあり、シモヤ(和人)はこれを寄木塚といい、アイノはこれをネツノシヤという。むかしカヤヘ(茅部)の湖水に竜蛇(オヤヲ)という神蛇(トコカムイ)のぬしがつねにすんでいて、ときには海をわたって、この浜にきてわだかまっていたので、行きかう人もメノコ、ヘカチ(女子供ら)はおそろしがって、このあたりを舟にのって通ることさえしなかった。それをアイノたちはたいへん心配して、木幣(イナヲ)をささげ、カムイノミ(神を祀って酒宴をすること)して、「オヤヲ、いまからここにけっして出でまし給うな。身をかくしてくださいる料として、ここを行きかうもの、メノコ、ヘカチに至るまでみなが、よせる波の浮木をひろい積み奉ることにして。オヤヲ、なにとぞ荒ぶる心を和めて鎮み給え。またアイノらのコタンを護り給え」と、大ぜい居ならんで、手をすり、レキ(ヒケ)をなでて供物をささげたところ、オヤヲをそれからここにいますとかが絶えてなくなったとか。この寄木塚は、みずおろち(水の神蛇)の住家であるという。海の荒れる日は、寄木はすっかり波にさらわれるが、なぎが近づくと、またもつのように流木が山をなすといわれている(231・232頁)。

松浦武四郎は、取調圖には「子ツニシヤ」と「ヨリキツカ」の二つの名称を、「竹四郎廻浦日記 下」には後者の名称のみを記し、特に解説記事はない。江戸時代の二人が記したアイヌ語の名称は「ネドヌサ」または「ネツニシヤ」で、和名の「寄木塚」も併用されていた。ここでは「ネドヌサ」の名称を使用する。すなわち「ネドヌサ」とは、海岸に生じた流木の集中にアイヌの伝説が加わり、同民族の信仰の対象になった場所で、和名もあることから和人にも認識された場所である。すなわち、静狩海岸に自然と流木が多く集まる場所があり、蛇が住み着いた。蛇が姿を現すとアイヌの女性や子供はこわがったので、徒歩はいうまでもなく舟で近くを通ることもしなくなった。畏怖の念からアイヌ住民はこの蛇を神格化し、この流木が集まる場所を祀ることにした。ここにいる蛇は、噴火湾の向こう

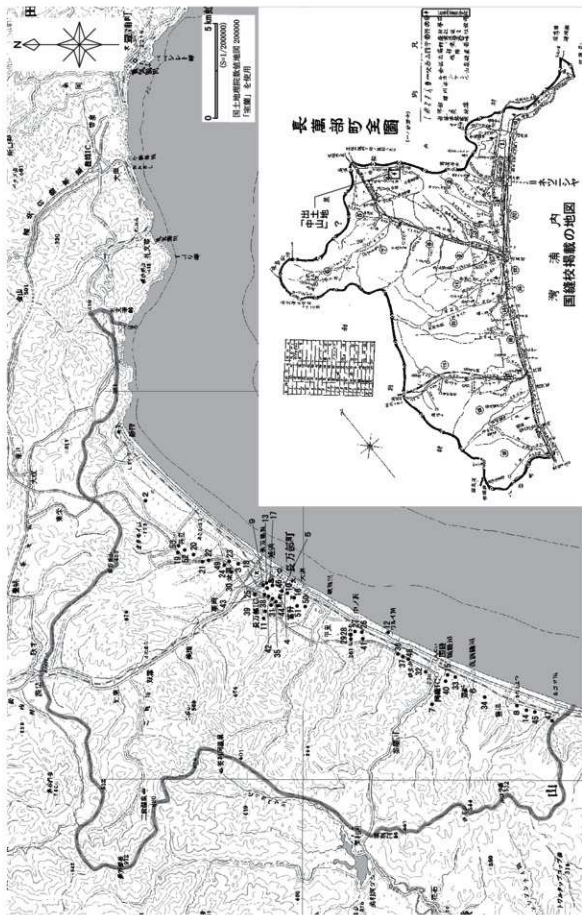


図 6 長万部町内の遺跡

側の砂原町から海を渡って遊びにやってきた「竜蛇」で、これら流木の集まりは蛇の神聖な居場所(住処)である。イナウをささげてカミノミをして、蛇が姿を現さないこと、コタンを守ってくれるよう祈りを捧げた。ここを通るみんなが流木を捧げることを約束したところ、蛇は姿を現さなくなったという。以上から、流木(ネド)の祭壇(ヌサ)と名付けられた信仰の場所になった。また海が荒れた時には、これらの木はすべて流されてしまうが、天候が回復すると再び、たくさんの流木が集まるとあり、地形や気象条件により絶えず流木が集まる場所であったのであろう。

ネドヌサの時期は、菅江真澄が旅した寛政3(1791)年にはすでに和名と共に存在しており、安政2(1855)年に松浦武四郎もこれを記載している。明治29(1896)年測量の地形図(図5右下)には記されたが、大正年間の地図では「濱中」に変更された(北理調報366 23頁・図15 24頁・図16)。以上から「ネドヌサ」は、少なくとも100年間は残された。さらに、図6の右下は、平成12(2000)年刊行の国縫小学校開校百周年記念誌『国縫校』の119頁記載の「長萬部全圖」であるが、現在は廃止された「旭濱驛」近くに「ネツヌシヤ」と記載があり、地形図に記載されなくなった後も地名が残っている側面もうかがえる。ネドヌサの現在の場所は、図5右下の図からオタモイ川の河口付近と判断される。この河川は戦後の静狩原野開拓工事で、人工的に造られた直線流路で内浦湾に流れ込んでいるので、当時の地形や自然条件とは異なっており、現在も昔のように流木が集中する現象があるのか定かではない。

ところで、オタモイ川の河口から内陸の北東方向へ500m、海岸からそう遠くない場所に保存記念木の「共立のイチイ」がある。かつて航行の目印となったといわれる樹齢300年のイチイと伝えられ、小さな祠と馬頭観世音と書かれた立板がある。ここは「龍神社」とも呼ばれ、現地説明看板によると「(略)いくつかの竜神さんの統合を機に由緒ある銘木に合祀した」とあり、この「いくつかの竜神さん(の信仰)」の一つは、このアイヌ民族の「ネドヌサ」の信仰と考えられる。アイヌ民族の信仰の場所が神社などに形を変えて、現在も地域で大切に信仰されている。ネドヌサを現地の海岸に復元整備し、史跡としてさらに積極的な保存活用を望むものである。

6. 長万部町内の遺跡(図6・表3)

現在、長万部町内では53か所の遺跡がみつまっている。先の報告書で詳述したので、詳細はそちらを参照されたい(北理調報366)。ここでは追加事項を記載する。

・オタモイ川・ナイベコシナイ川流域 共立地区東側

共立3遺跡(53)が新発見で、縄文時代早期の貝殻文と東銘路式期の土器が出土している。

・知来川流域 巖岱地区

出土地「中山」は、長万部町史の27・31頁に遺物写真が掲載されている。現在この名称の遺跡はないが、特定する手掛かりが前述の『国縫校』の「長萬部全圖」にある。同圖には、石器時代遺物発見地が「黒塗りの巖」で記されている、「知来六線」表記のそばに記号がある。現在、巖岱地区では周知の遺跡がないので、ここが出土地「中山」である可能性が考えられる。(末光)

表3 長万部町内の遺跡一覧表(1)

遺跡名 所在地	遺跡名	学名	大河川	中世村 名	立地	埋没 (m)	種類	内容				実証範囲内内容				調査年度	調査者	備考
								時代	遺構	土層	石積	その他	調査年月	調査方法	調査範囲(m)			
1	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~40	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	野村貝塚	野村	野村川	—	長万部	10~15	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3	家原遺跡	家原	家原川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4	宮野遺跡	宮野	宮野川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5	宮野山遺跡	宮野	宮野川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6	宮野1遺跡	宮野	宮野川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7	宮野2遺跡	宮野	宮野川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	宮野3遺跡	宮野	宮野川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	トノ山遺跡	トノ山	トノ山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	オノ山遺跡	オノ山	オノ山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	丸山遺跡	丸山	丸山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	丸山遺跡	丸山	丸山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	トノ山遺跡	トノ山	トノ山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17	トノ山遺跡	トノ山	トノ山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	丸山遺跡	丸山	丸山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20	丸山遺跡	丸山	丸山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21	丸山遺跡	丸山	丸山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	丸山遺跡	丸山	丸山川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	野村川遺跡	野村	野村川	—	長万部	10~20	縄文時代 前期	縄文時代 前期	土器 土器 土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表3 長万部町内の遺跡一覧表(2)

遺跡番号	遺跡名	年代	大河川	中河川	支流	埋没 (m)	種類	内容					発掘経緯内等			発掘者	備考
								時代	遺構	土器	石器	その他	発掘年次	発掘トレンチ	調査面積㎡		
25	オパールピア3遺跡	古墳	オパールピア3	長万部川	北	約1.0	古墳	縄文時代前期	土器	石器	その他	平成13年度	オパールピア3	1,700	遺跡発掘調査	長万部川(オパールピア)の古墳群調査(1)として、古墳群の中心部を調査し、その位置関係を明らかにする。	
								縄文時代後期	土器	石器	その他	平成14年度	オパールピア3	6,324	遺跡発掘調査		遺跡発掘調査(2)
								縄文時代	土器	石器	その他	平成15年度	オパールピア3	5,700	遺跡発掘調査		遺跡発掘調査(3)
26	中河川1遺跡	古墳	中河川	南	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	中河川1	1,700	遺跡発掘調査			
27	中河川2遺跡	古墳	中河川	南	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	中河川2	1,700	遺跡発掘調査			
28	中河川3遺跡	古墳	中河川	南	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	中河川3	1,700	遺跡発掘調査			
29	中河川4遺跡	古墳	中河川	南	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	中河川4	1,700	遺跡発掘調査			
30	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
31	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
32	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
33	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
34	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
35	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
36	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
37	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
38	オパールピア3遺跡	古墳	オパールピア3	長万部川	北	約1.0	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	オパールピア3	1,700	遺跡発掘調査			
39	オパールピア4遺跡	古墳	オパールピア4	長万部川	北	約1.0	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	オパールピア4	1,700	遺跡発掘調査			
40	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
41	オパールピア3遺跡	古墳	オパールピア3	長万部川	北	約1.0	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	オパールピア3	1,700	遺跡発掘調査			
42	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
43	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
44	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
45	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
46	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
47	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
48	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
49	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
50	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
51	笠野4遺跡	古墳	笠野川	北	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	笠野4	1,700	遺跡発掘調査			
52	奥山遺跡	古墳	奥山	南	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	奥山	1,700	遺跡発掘調査			
53	奥山遺跡	古墳	奥山	南	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	奥山	1,700	遺跡発掘調査			
一	中河川(遺跡)	古墳	中河川	南	約1.0	古墳	古墳	土器	石器	その他	平成13年度	中河川	1,700	遺跡発掘調査			

III章 調査の概要

1. 発掘区の設定(図7・8 表4 図版2)

グリッドの設定と調査杭の打設

図面は JRTT から提供された電子図面(sfc 形式)で、名称は「北海道新幹線(新函館北斗・札幌間)新青森起点 224 Km900m～226 Km200m 用地平面図 1:1000 1図葉の内1」(令和2年1月31日)である。また発掘調査範囲が示された包蔵地試掘調査の図面は PDF 形式であったので、工事図面上に発掘調査範囲を定め、CAD図上で平面直角座標の数値を読図できるようにした(表4)。調査グリッドは世界測地系の平面直角座標で設定した。長万部地域は「第XI系」座標原点の第四象限にあたり、縦方向のX軸は負、横方向のY軸は正になる。調査区からみて平面直角座標の原点が位置する方向である「北西側」の調査区外に「グリッド原点 A-0」を設定し、調査区全体を網羅するように5mごとに区画した。南北方向のX軸は、アルファベットを北から南方向へ昇順(A→)するように付し、東西方向のY軸は算用数字で示し、西方向「0」から東方向へと値が大きくなる。各グリッドの呼称も「北西側」の杭名とし、アルファベットと算用数字を列記して表記する。

現地に打設した杭は以下のとおりである。

「範囲杭」(白色): 調査区形状の変化点

「基準杭」(黄色): グリッド交点 標高をもつ杭で10mごと

「方眼杭」(赤色): グリッド交点 5m間隔(基準杭を除く)

加えて、調査区形状が東西に細長いので、現地でグリッドを正確に認識できるように「方向杭」を、南北方向の数字ラインと範囲杭を結ぶ線が交差する点に設けた。具体的には、方眼杭E11のある11ラインと南北両側の調査区界との交点、北側は「11N」、南側は「11S」とした。これら調査杭の打設は近傍の2級基準点「N0.227」、4級基準点「TA23」を、水準測量は「N0.227」が3級水準点も兼ねていたため、これらを基点とした。

2. 基本土層

基本土層はこれまでの長万部町内での発掘調査を参考に、次のように区分した。色調及び土層の観察項目は『標準土色帖』(小山・竹原 2011)と『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会 1984)による。

・基本土層(表5 口絵2 図版2)

I層: 現地表土

K o o d : 黄灰色 寛永17(1640)年に降下した駒ヶ岳d火山灰(付篇2参照)

この層は土壌化が進んでおり、下位のII層近くでは縄文時代の遺物が出土した。

II層: 黒色土層 遺物包含層

III層: やや黒色味がある漸移層 遺物包含層

IV層: 黄褐色ローム土 地山

山側の西側部分では、最上位に盛られた砂利、その下位に墓参り時に生じた酒瓶などのごみが堆積していた。

・基本土層図(図2・11上)

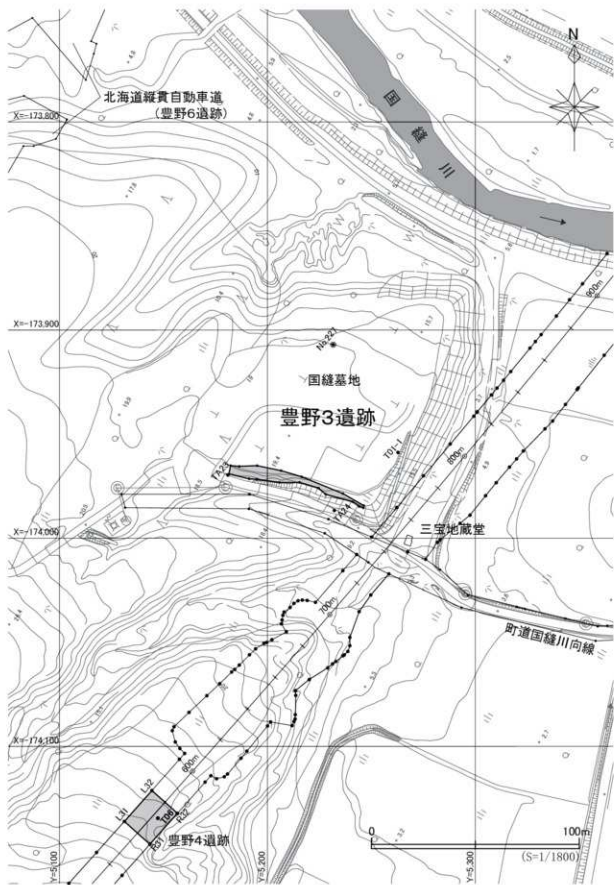


図7 遺跡現況図 (工事図面)

表4 発掘調査基準点一覧表

種類	杭名	世界測地系					備考
		平面直角座標 (m) X Y 系		標高 (m)	地理座標 (° - ' - ")		
		X	Y		北緯	東経	
グリッド座標 原点	A-0	-173,950,000	5,150,000				
2級基準点 3級水準点	既設 No.227	-173,907,006	5,231,641	18.773			
4級基準点	既設 TA23	-173,969,615	5,180,963	—			
補助基準点	新設 TA23-1	-173,969,860	5,222,508	—			
調査区中央付近 基準杭	E-12	-173,970,000	5,210,000	18,866	42-26-02.0	140-18-48.0	
範囲杭	ハ1	-173,965,083	5,182,273				
	ハ2	-173,965,412	5,186,480				
	ハ3	-173,965,096	5,195,069				
	ハ4	-173,967,491	5,206,606				
	ハ5	-173,970,411	5,216,481				
	ハ6	-173,978,512	5,236,322				
	ハ7	-173,984,328	5,246,451				
	ハ8	-173,985,487	5,246,174				
	ハ9	-173,984,828	5,244,145				
	ハ10	-173,982,572	5,241,075				
	ハ11	-173,978,931	5,227,962				
	ハ12	-173,975,921	5,224,565				
	ハ13	-173,973,236	5,215,452				
	ハ14	-173,973,218	5,205,702				
	ハ15	-173,971,721	5,194,952				
	ハ16	-173,971,520	5,191,279				
	ハ17	-173,969,162	5,181,411				

表5 基本土層

層名	層分類	名称	層厚 (m)	層界	砂・砂立・シルト (長径2mm未満)				礫 (長径2mm以上)				記入物	地層地 状調査書 での層名	備考		
					野状 土性	色調 色名	サンプリ 集積量	粘着性	塑性性	層厚	層厚 割合 (%)	割合 (%)				形状	長径の 幅度
—	—	砂	30	砂質土	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	砂	砂質土の地層地状調査書の 記載がないことによる	
—	—	砂質シルト	3	砂質	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	砂質シルト 地層地状調査書の 記載がないことによる	
1層	—	粘黄土	20	粘土-砂質土	—	黄褐色	1000.0	0	粘	—	—	—	—	1*	粘黄土 (硬粘土)		
Kc-1	—	黄褐色 灰山泥	2~5	砂質-粘土	—	灰白色 褐色	1000.0	0	粘	—	—	—	—	1*	粘黄土 多量砂	透水試験結果より、 不透水性を有するものと 見られることによる	
2層	—	黄粘土	10~20	粘土	—	黄色	1000.0	0	粘	—	—	—	—	2	粘黄土	透水性調査	
3層	—	黄砂層	5~10	砂質土	—	黄褐色	1000.0	0	粘	—	—	—	—	2*	黄砂層	透水性調査	
4層	上層	地山	100.0	—	粘黄土	—	黄褐色	1000.0	0	砂立土	—	—	—	—	3	黄砂土	
	砂質土				—	黄褐色	1000.0	0	砂立土	—	—	—	—	—	—	—	—

グリッド原点 A-0
 X=-173,950.000m
 Y=5,150.000m

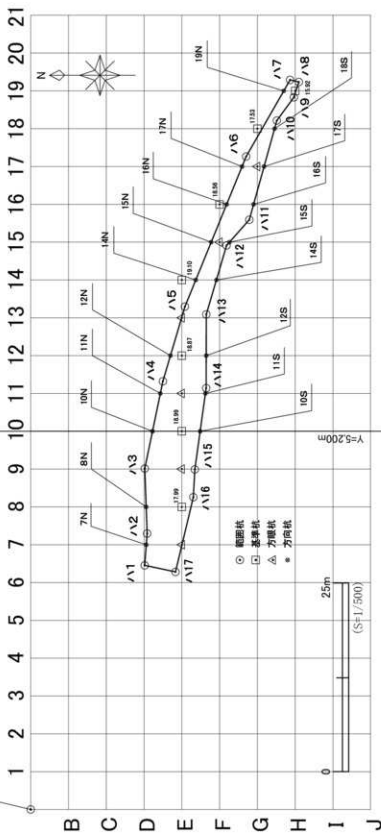


図8 グリッド設定図

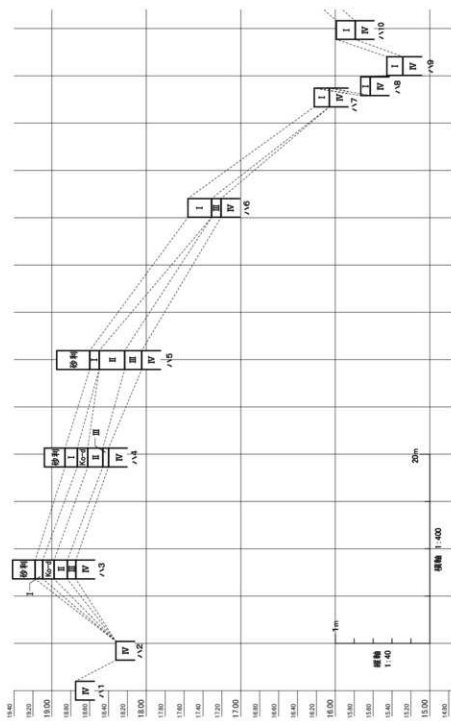


図9 範圍杭山柱状図(1)

台地平坦部のD-11区の調査区北側壁で作成した。

・杭山柱状図

遺跡全体の各層の広がりやの記録として、調査区保護のため周囲を掘り残した部分(杭山)の土層断面から柱状図を作成し、調査範囲やグリッドラインごとにこの柱状図を配置したものを掲載する。これらは地形の高低差と土層の状態が視覚的に把握しやすく、範囲杭柱状図では遺跡全体を、グリッドライン柱状図は、任意のグリッド間といった細部の様子を表現できる。

・範囲杭山柱状図(図9・10)

ハ1・2付近は地山のIV層まで削平されている。ハ3・4はK o - dが堆積し、ハ5は土層の残りが良いが、火山灰はみられない。ハ6ではII層がなく、ハ7～11はI層の直下は地山である。ハ12はK o - dが薄くみられ、ハ13はII層が無くI層が厚い。ハ14～ハ17はIV層まで掘乱されている。

・東西方向グリッド杭山柱状図(図11下)

Eラインは、E7～9はIV層まで削平され、IV層上面からの深さはE10から推定して60～80cm程度である。E10～12は概して平坦で、E11は掘乱、E13は調査区境界付近であるので、砂利が厚く盛られている。GラインはI層のみで、町道側に位置するG-17が低い。

・南北方向グリッド杭山柱状図(図12)

7・8ラインは掘乱部分である。10～12ラインは、北側の調査区壁は土層が残りに、南側へは急な崖である。14ラインには掘乱があり、15ラインは緩い斜面で、高い部分にK o - dが残存する。16～19ラインは南側への急な崖で、低い部分にI層が残っている。(末光)

3. 調査の方法

調査区内の立木はそのままにした。重機による表土除去はI層から直下の黄灰色火山灰までを重機で掘削する予定であった。この火山灰は周辺の調査事例から、寛永17(1640)年に降下した駒ヶ岳d火山灰(K o - d)であり、加えて、遺跡周辺は寛文9(1667)年蝦夷の乱(シャクシャインの戦い)の古戦場と伝えられており、この痕跡が土中でみつかる可能性が考えられた。そこで、火山灰が良好に残る部分は重機での表土除去をK o - dの直上までとし、これより下位は人力で調査した。しかし、関連する遺構や遺物はみつからなかった。包含層の残存状態は、海側の東側では火山灰層がなく直下は漸移層のIII層で、山側の西側は、火山灰層とII層の黒色土層が厚くみられた。はじめに、表土除去後の地形測量図を作成し、発掘を開始した。杉の木が3本ある西側端の掘乱部分を排土場にした都合と層が厚く遺物包含層が良好に残る西側を優先することから、調査は山側の西から海側の東へと展開させた。包含層調査では、遺物の出土状況を把握して遺構確認を併せて行い、これらの確認・発見に努めた。遺構と予想した部分は半截、あるいはトレンチを設けて掘り下げ、土層断面で遺構が否か判断した。また遺物が多い部分は遺物集中として記録した。また調査区西側は急斜面であるため、杭付近にトレンチを設けて包含層が残存しないことを確認した(図版6)。人力での掘削を完了させてから、最終面であるIV層上面の地形測量図を作成した。

4. 整理の方法

(1) 一次整理の方法

遺物は、現場で「遺跡名(略号;ト3):出土地点(遺構名・グリッド):出土層位:遺物種別(土器 剥片石器 礫石器とレキ その他の四つに大別):取り上げ番号(出土位置記録のもの):取り上げ年月日」の情報を記したビニール袋に取り上げた。現場事務所では袋ごとに「取り上げ台帳」(水洗台帳)

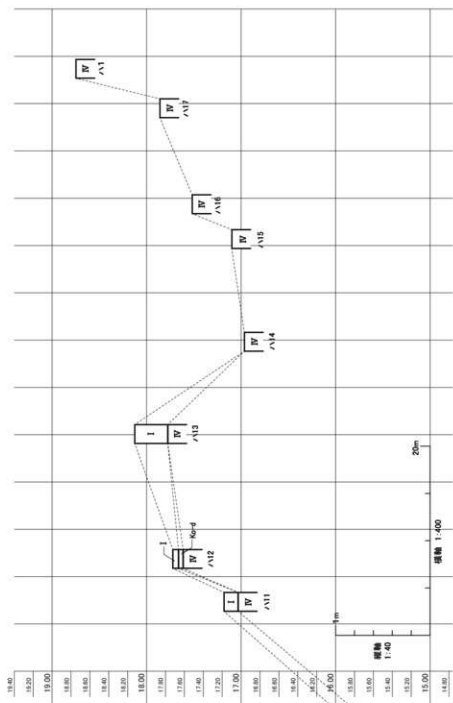
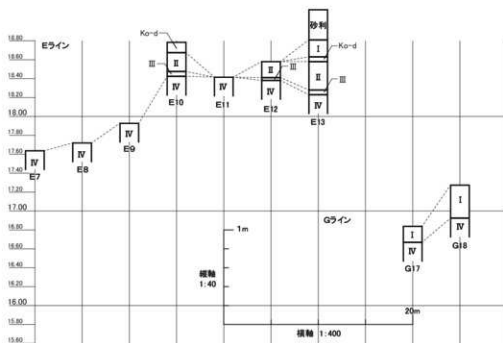
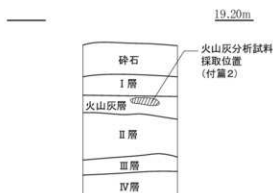


図10 範圍杭山柱状図(2)



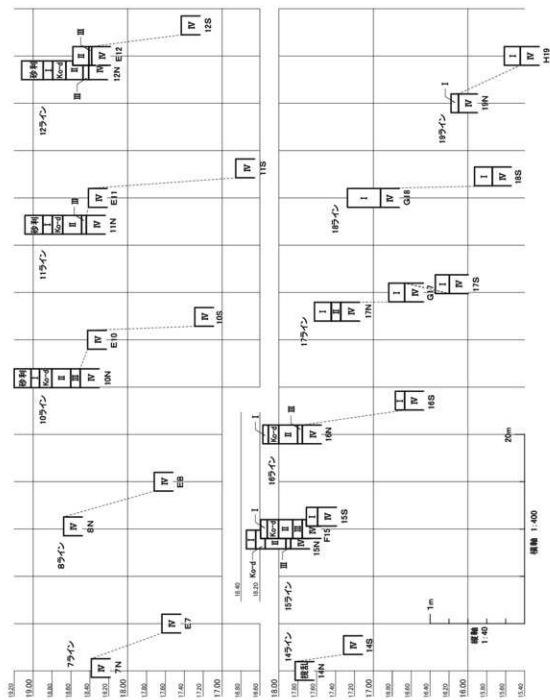


図12 南北方向グリッド杭山柱状図

に記録し、一次整理作業の流れを管理した。遺物は「水洗」・「乾燥」した後、「分類」し、出土地点・出土層位・遺物名等の遺物個別の情報を「遺物カード」に記し、チャック付きビニール袋に遺物とともに収納した。また、その遺物カードの記載事項を一覧表に書き記した(手書きの遺物登録台帳)。これをExcelデータに清書・入力したものを「遺物登録台帳」として完成させ、二次整理作業を進めるための基本情報とした。土器は接合作業を行うため、遺物カードの情報の一部を直接遺物に「注記」した。内容は「遺跡名：出土地点：出土層位：取り上げ月日：遺物番号」である。内容は、遺跡名は略号の「ト3」、出土地点は、遺構名(ハイフンあり)またはグリッド名(ハイフンなし)、出土層位、取り上げ月日：0611(算用数字4桁)である。

(2) 二次整理の方法

・遺物カード・遺物登録台帳の点検・修正

遺物カードと遺物登録台帳は相互に照合して点検した。誤りは「水洗台帳」等の他の記録で裏付けがとれるものや、誤記等の簡易な誤りを修正した。土器接合作業の結果、時期が判明したなどの変更は、時間的な制約から修正できなかった。なお集計作業はこのExcelデータから作成した。

・土器

接合作業は、残存状態が「良好」・「剥離」のものを中心に、遺構出土土器の接合は遺構内、遺構間、遺構が位置するグリッド、周辺のグリッドへと展開し、包含層出土のものは破片が多いグリッドから周囲へ広げるように進めた。接合した破片は復元可能なものを接着し「バイサム」で補填して復原した。復原土器は立面実測図を作成し、破片土器は特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片を中心に選び出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせて図示した。すべての掲載土器は観察表を作成した。

・石器

石器は、残存状態が「完形」・「準完形」のものを中心に、器種や形態の多様性を示せるように掲載する石器を選び出し、実測図と観察表を作成した。

5. 写真撮影

現場撮影、スタジオ撮影共に、フルサイズミラーレスカメラ(SONY α 7RIV)を用いて、同一カットを同じ条件(シャッタースピード・露出)で2コマ撮影し、それをもって1セットとした。撮影に際しては、カラーチェッカーバスポート(X-rite社)のホワイトバランスターゲットを用いてカメラのホワイトバランスを調整した後、同カラーチャート撮影してから本撮影を行った。撮影したカラーチャートからRAWデータ現像時にプロファイルを作成、本撮影のデータに適用して、カラーバランスの統一を図った。

現場では、ドローン(DJI MAVIC 2 PRO)での空撮や、メモ写真として、コンパクトデジタルカメラ(SONY RX0 II)での撮影も行った。全ての撮影データはRAW形式で記録し、Adobe Lightroomで現像処理を行った。撮影データは、FileMaker Proで管理している。

6. 遺物の分類基準

土器は表6「土器時期分類基準」・表7「土器部位分類基準」・表8「土器残存状態分類基準」で、石器は表9「石器器種分類基準」・表10「石器残存状態分類基準」で、岩石の種類は表11「岩石分類体系表」・表12「岩石(石材)の略号」に基づき分類した。(吉田)

表7. 土器器状分類基準

器種	時代	時期	器	土器器・器式名
土器			前期 1期	a0 自然文・無文・有文線文・有字土器群 a1 彩線式土器群
			前期 2期	a2 無文土器群
			中期	b0 内底土器群、その他に伴う土器群 b1 有文土器群、有文土器群、有文土器群 b2 有文土器群、有文土器群、有文土器群 b3 有文土器群、有文土器群、有文土器群
			後期	c0 クワツキ式、手懸かたツツなどに相当する土器群 c1 突脚式、三脚式、脚輪式に相当する土器群 c2 丸脚式、大脚式、その他に伴う土器群 c3 大脚式、大脚式、その他に伴う土器群 c4 丸脚式、大脚式、その他に伴う土器群
			前期	前期土器
			中期	中期土器(大規模生産型)
			後期	後期土器(小規模生産型)
			前期	前期土器(大規模生産型)
			中期	中期土器(大規模生産型)
			後期	後期土器(大規模生産型)

表7. 土器器状分類基準

器種	器	土器器・器式名
口縁部		口縁部 a0 自然文・無文・有文線文・有字土器群 a1 彩線式土器群
胴部		胴部 b0 内底土器群、その他に伴う土器群 b1 有文土器群、有文土器群、有文土器群 b2 有文土器群、有文土器群、有文土器群 b3 有文土器群、有文土器群、有文土器群
脚部		脚部 c0 クワツキ式、手懸かたツツなどに相当する土器群 c1 突脚式、三脚式、脚輪式に相当する土器群 c2 丸脚式、大脚式、その他に伴う土器群 c3 大脚式、大脚式、その他に伴う土器群 c4 丸脚式、大脚式、その他に伴う土器群
不明		不明

表7. 土器器状分類基準

呼称	内容	備考
良好	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群
割断	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群
部材	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群
小片群	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群	・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群

表7. 石製器状分類基準

分類	器種・名称	備考	主要な石種
削片 石 器	石錐		
	石棒・ナイフ		
	コブ状石ナイフ	石錐	
	スリ・レイバー	石錐	
	ウレシク	石錐	
	石錐	石錐	
	フレイク・ツツ	石錐	
	石錐	石錐	
	石錐	石錐	
	石錐	石錐	
磨石 器	磨石		
	磨石		
	磨石		
	磨石		
	磨石		
	磨石		
	磨石		
	磨石		
	磨石		
	磨石		
石製品	石製品		
	石製品		
	石製品		
	石製品		
	石製品		
	石製品		
	石製品		
	石製品		
	石製品		
	石製品		

表7. 石製器状分類基準

器種	内容
削片石器	削片石器 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群
石製品	石製品 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群
磨石器	磨石器 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群
レキ	レキ ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群 ・器底に自然文・有文線文・有字土器群

表11 岩石分類体系

火成岩	侵入岩 深成岩 (花崗岩) (正長岩)	深成岩 (中性)	深成岩 (酸性)	深成岩 (超酸性)	深成岩 (超超酸性)
	噴出岩 (安山岩) (玄武岩) (玄武岩)	噴出岩 (中性)	噴出岩 (酸性)	噴出岩 (超酸性)	噴出岩 (超超酸性)
火成岩	花崗岩	正長岩	玄武岩		
準火成岩	閃緑岩	閃緑岩	玄武岩		
深成岩	閃緑岩	閃緑岩	玄武岩		
噴出岩	玄武岩	玄武岩	玄武岩		
火山岩	玄武岩	玄武岩	玄武岩		
侵入岩	玄武岩	玄武岩	玄武岩		
噴出岩	玄武岩	玄武岩	玄武岩		

火成岩

火成岩	火成岩	火成岩	火成岩
深成岩	噴出岩	準火成岩	深成岩
深成岩	噴出岩	準火成岩	深成岩
深成岩	噴出岩	準火成岩	深成岩
深成岩	噴出岩	準火成岩	深成岩

火成岩

深成岩	噴出岩	準火成岩	深成岩
-----	-----	------	-----

火成岩

深成岩	噴出岩	準火成岩	深成岩
-----	-----	------	-----

* 石英質 (ワイレ) 類 SiO2 の岩石-鉱物の揮発性分類体系

石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類
石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類
石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類	石英質 (ワイレ) 類

表12 岩石 (石材) の略号

大項目	小項目	岩石名	英略名	略号
火成岩	火山岩類	輝石 (輝石)	Pyrox	
		斜輝 (スカー)	Spdx	
		黒輝石 (黒輝石)	Obs	
火成岩	火成岩類	閃緑岩	Rhy	
		安山岩	And	
		玄武岩	Bas	
		花崗岩	Grn	
		閃輝石	Dio	
	準火成岩類	閃輝石	Gabb	
		輝石	Serp	
		閃輝石	Pdx	
		閃輝石	Lsp	
		閃輝石	Tuf	
		閃輝石	Com	
準火成岩類	砂岩	Snd		
	砂岩	Mud		
	砂岩	Gla		
	砂岩	Shl		
	砂岩	Cha		
準火成岩類	片岩	Sch		
	片岩	Gls		
	片岩	Gls		
	片岩	Gls		

IV章 遺構と出土遺物

1. 遺構の概要 (図13 表13・14・15)

調査した遺構は、土器集中3か所、フレイク集中1か所である。周囲の包含層に比して、遺物が多くみられた範囲を遺物集中として記録して取り上げた。これらはすべて調査区の中央から西側の平坦部で土層の残存状態が良い部分に位置する。

2. 土器集中 (図14 表13 図版3)

PS-1 (図14 図版3)

位置 D-9区 層位 III層 規模 0.41×0.25m

確認・調査 包含層調査中、III層で土器がまとめて出土したので、範囲を記録して取り上げた。I群b類の東鉤路IV式の復原個体が得られた。

時期 縄文時代早期後半である。

PS-2 (図14 図版3)

位置 E-11区 層位 II層 規模 0.30×0.14m

確認・調査 包含層調査中、II層で土器がまとめて出土したので、範囲を記録して取り上げた。I群b類の東鉤路IV式である。

時期 縄文時代早期後半である。

PS-3 (図14 図版3)

位置 D-9区 層位 III層 規模 0.20×0.20

確認・調査 包含層調査中、III層で土器がまとめて出土したので、範囲を記録して取り上げた。I群b類の東鉤路IV式である。

時期 縄文時代早期後半である。

3. フレイク集中 (図14 表13 図版3)

FC-1 (図14 図版3)

位置 D-11区 層位 III層 規模 0.50×0.32m

確認・調査 包含層調査中、III層で土器破片と頁岩のフレイクがまとめて出土したので、範囲を記録して取り上げた。定型的な石器は出土していない。

時期 出土土器から縄文時代早期後半と考えられる。

4. 遺構出土の遺物

図はV章の包含層出土遺物とともに掲載する。

(1) 復原土器 (図15 表16 図版8)

PS-1出土

1は、口唇断面は丸形で、口縁部から胴部上位は直立気味で、胴部下位へ緩やかにすばまり、そこ

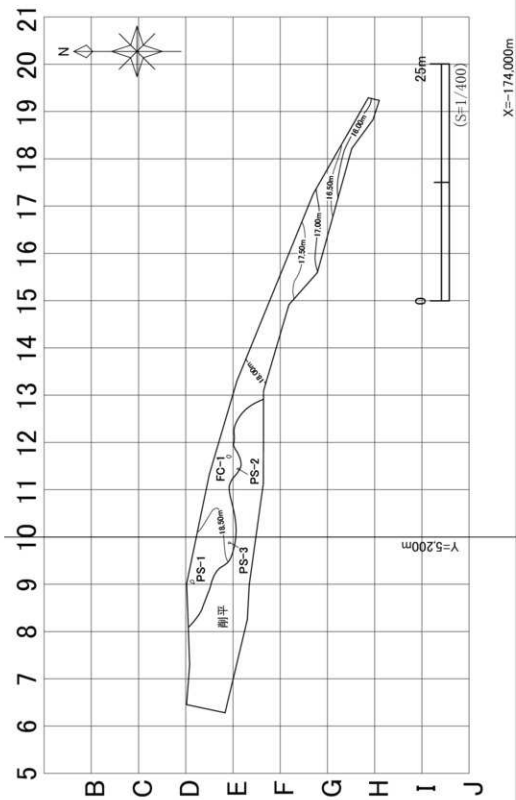
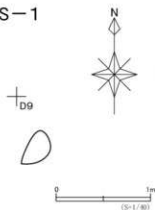


図13 最終地形測量図・遺構位置図

X=-174,000m

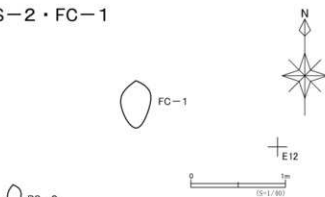
Y=5,200m

PS-1



PS-1										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	土器	I群	口縁部	良好	2	III層	—	230523	○	
			胴部	良好	15					
			胴部	剥離	2					
			胴部	小破片	2					
	不明	口縁部	小破片	1						
	フリイク	頁岩	—	9						
フリイク	黒曜石	—	1							

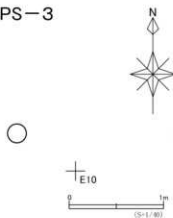
PS-2・FC-1



PS-2										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	土器	I群	胴部	良好	4	II層	18.51～18.53	230601	○	

FC-1										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	土器	I群	胴部	良好	1	II層	18.55	230601	○	海綿管針
					99					
	フリイク	頁岩	—	—	1					被熱

PS-3



PS-3										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	土器	I群	胴部	良好	7	III層	18.47～18.51	230608	○	海綿管針
				小破片	3					海綿管針
				良好	13					
				小破片	9					

図14 遺物集中

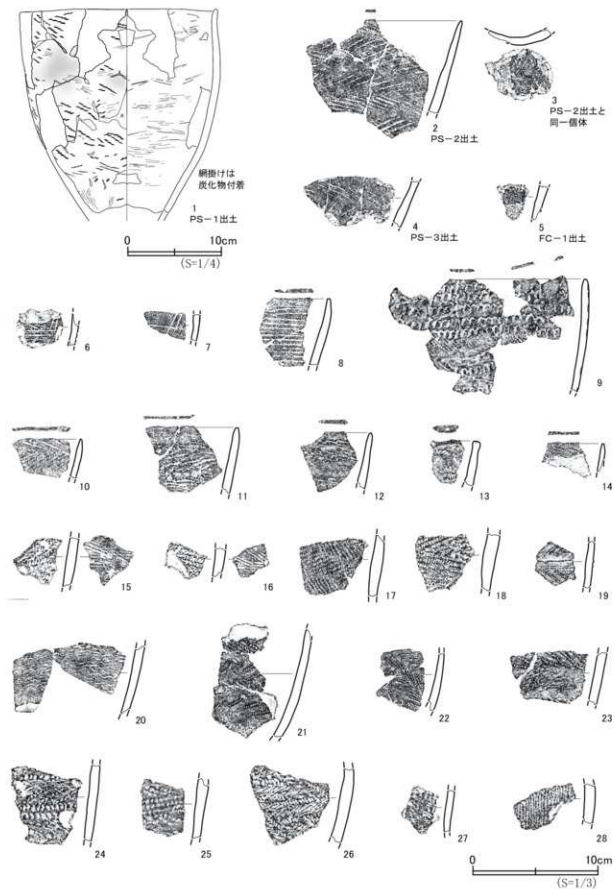


図15 遺構・包含層出土土器

からさらに急角度にすばまる器形を呈する。口唇部は無文で、口縁部から胴部上位は、Rの撫紐を用いた左上がりの条がみられ、下位では右上がりの条も一部みられ羽状を呈する。内面は横方向のナデで、沈線文状の調整痕が観察され、外面には炭化物が付着する。I群b類の東銅路IV式で、底部は丸底と考えられる。

(2) 破片土器 (図15 表17 図版8)

PS-2出土 2は口縁部で、口唇部断面は尖り、外面に羽状撫糸文が観察される。3は撫糸文が施された丸底の底部で、2と同一個体と考えられるのでここに掲載した。

PS-3出土 4は羽状撫糸文が整然と施される。

FC-1出土 5は胴部で、文様は不鮮明で、胎土には海綿骨針を多量に含む。

(吉田)

表13 遺物集中一覧表

遺構 種別	遺構名	図	園	グリッド	確認 層位	分布範囲 形状	規模 (m)			出土遺物		付属遺構 関連する遺構	図化した 内容	備考
							長径	短径	最大厚	土器	石器			
土器 集中	PS-1	14	3	D-9区	Ⅲ層	楕円形	0.41	0.25	—	I群	フレイク	—	範囲	
	PS-2	14	3	E-11区	Ⅱ層	楕円形	0.30	0.14	—	I群	—	—	範囲	
	PS-3	14	3	D-9区	Ⅲ層	楕円形	0.20	0.20	—	I群	—	—	範囲	
フレイク集中	FC-1	14	3	D-11区	Ⅱ層	円形	0.50	0.32	—	I群	フレイク	—	範囲	

表14 遺構出土土器点数表

遺構 種別 / 層位	遺構名		PS-1		PS-2		PS-3		FC-1		合計
	土器		Ⅲ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅲ層	小計	Ⅱ層	小計	
	時期	部位	残存状態								
I群	口縁部	良好	2								2
		剥離 腐蝕		2		0		0		0	0
		小破片									0
	底部	良好									0
		剥離 腐蝕		0		0		0		0	0
		小破片									0
	胴部	良好	15		4		30		1		40
		剥離 腐蝕	2	19	4		32		1		2
		小破片	2				12				14
	不明	良好									0
		剥離 腐蝕		0		0		0		0	0
		小破片									0
小計			21	4		32		1		58	
不明	口縁部	良好									0
		剥離 腐蝕		1		0		0		0	0
		小破片	1								1
	底部	良好									0
		剥離 腐蝕		0		0		0		0	0
		小破片									0
	胴部	良好									0
		剥離 腐蝕		0		0		0		0	0
		小破片									0
	不明	良好									0
		剥離 腐蝕		0		0		0		0	0
		小破片									0
小計			1	0		0		0		1	
合計			22	4		32		1		59	

表15 遺構出土石器点数表

遺構名			PS-1		FC-1		合計
器種名・分類 / 層位			Ⅲ層	小計	Ⅱ層	小計	
器種	岩石	—	9	10	99	100	108
剥片石器	フレイク	頁岩	—	—	1	1	1
		被熱	—	—	—	—	—
	黒曜石	—	1	—	—	1	1
剥片石器 小計			10	10	100	100	110
合計			10	10	100	100	110

表16 PS-1出土復原土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
								器高	口径	底径				
15	1	8	PS-1	Ⅲ層	0522	—	9	22.5	22.8	(丸底)	800	Ⅰ群b型	東照館式	
埋否破片点数		同一個体破片	結合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)		計測値 (cm)		重量 (g)		部位		備考 (分類・型式)		
98				Ⅲ-8区・Ⅰ層・0516→→ (1)		19-8区・器高・0515→→ (1)		19-8区・器高・0519→→ (3)		Ⅰ群b型		Ⅰ群b型・東照館式		
99				Ⅲ-9区・Ⅱ層・0519→→ (3)		19-9区・器高・0522→→ (1)		19-9区・器高・0523→→ (1)		Ⅰ群b型		Ⅰ群b型・東照館式		
100				Ⅲ-9区・Ⅱ層・0523→→ (1)		19-9区・器高・0524→→ (1)		19-9区・器高・0525→→ (1)		Ⅰ群b型		Ⅰ群b型・東照館式		
合計												39		
胎土 (泥和材)		繊維	—	粒径	中粒	量	中量	種類	粘土・泥粉	主にもろ	備考			
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	ナデ	にぶい・褐色 (T.0196/3)	黒色化	—	口唇部 (20%)									
	右等身横文	にぶい・褐色 (T.0196/4)	黒色化 炭化物付着	—	口縁部 (20%)									
	右等身横文	にぶい・褐色 (T.0196/4)	黒色化 炭化物付着	剥離	胴部上半 (20%)									
内	右等身・右等身 斜状横文	にぶい・褐色 (T.0196/4)	赤褐色・褐色 (T.0197/1)	剥離	胴部下半 (20%)	ナデ 炭質文様の調整品	にぶい・褐色 (T.0196/4)	黒色化 炭化物付着	—	剥離	内			

表17 遺構出土破片土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取上日	遺物番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類	備考
							小計	合計					
胎土 (泥和材)													
繊維		粒径・量	種類(名称)	外面	内面	文様・調整		色調		使用の痕跡		土器型式	
15	2	8	PS-2	Ⅱ層	0601	—	4	9	口縁～胴部	56.5	深鉢	1群b型	3と同一個体?
		E-11区		Ⅱ層	0601	—	5	—	—	—	—	—	—
無		中粒・少量	動物主体 (右系)	右状横文 (R左巻・L右巻)	ナデ	炭質文様の調整品	にぶい・黄褐色 (T.0196/3)	(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	東照館式			
15	3	8	D-8区	Ⅱ層	0517	—	1	1	底部(丸底)	10.4	深鉢	1群b型	2と同一個体?
無		細粒・少量	粘土主体 (右系)	右状横文 (R左巻・L右巻)	ナデ	炭質文様の調整品	にぶい・黄褐色 (T.0196/3)	(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	東照館式			
15	4	8	PS-3	Ⅲ層	0608	—	3	3	胴部	16.2	深鉢	1群b型	
無		細粒・少量	粘土主体 (右系)	右状横文 (R左巻・L右巻)	ナデ	炭質文様の調整品	にぶい・黄褐色 (T.0196/3)	(黒褐色)	赤褐色 にぶい・褐色 (T.0196/4)	黒色化 炭化物付着	東照館式		
15	5	8	FC-1	Ⅱ層	0601	—	1	1	胴部	4.1	深鉢	1群b型	
無		中粒・少量	動物主体 (石灰 陶質骨粉)	無文 ナデ?	ナデ	炭質文様の調整品	(黒褐色)	炭質文様の調整品	黒色化 炭化物付着	—			

V章 包含層出土の遺物

1. 遺物の概要 (図16・17 表18・19)

出土点数表(表18・19)

包含層の土器は645点出土した。出土層位は、Ⅱ層・Ⅲ層がともに43%で、Ⅰ層14%である。時期分類はⅠ群が96%で、そのうち91%が胴部である。石器は2,280点出土した。出土層位は最多のⅡ層が58%で、ついでⅢ層が34%、Ⅰ層が6%である。内訳は剥片石器が98%で、礫石器0.5%、石製品0.04%、レキ1.7%である。剥片石器をみると、定型的な石器の点数は石鏃10点、石槍・ナイフ2点、つまみ付きナイフ6点、スクレイパー14点である。フレイクは94%と最多を占め、これの石材の97%が頁岩である。石器製作に関わる石核はすべて頁岩・チャート製で、黒曜石製造物は全部で47点と圧倒的に少ない。礫石器の内訳はたつき石1点、すり石5点、台石5点と全体的に少なく、石材は安山岩と凝灰岩で、石製品は閃緑岩製の1点である。レキ(自然礫)もさほど多くはなく、U・Rレキが5点、レキが34点である。本遺跡の主たる時期はⅠ群の縄文時代早期で、石器も同時期と考えられる。

出土分布図(図16・17)

遺物はすべて調査区中央から西側で出土した。これの主たる要因は、東側の包含層の残存状態が不良であったからである。「土器合計」はD-9・10区に多く、「Ⅰ群」も同じである「剥片石器合計」は西側に多く、「石鏃」・「石槍・ナイフ」、「つまみ付きナイフ」、「スクレイパー」はD-9区に最多で、「U・Rフレイク」・「石核」も同様である。「フレイク」はFC-1があるD-11区が最多で、その南側のE-11区も周囲に比べてやや多い。またG-18区から1点出土している。「原石」はD-10区が最多で、最も東側の出土はF-14区である。「礫石器合計」はD-9区が最多である。「たつき石」はD-8区、「すり石」はD-9区出土である。「台石」はD-8・9区に多く、東側のF-15区からも出土している。「石製品」はD-9区の出土である。「レキ合計」は調査区の中央から西側にみられ、「U・Rレキ」・「レキ」はD-9区に多い。

2. 土器(図15 表20 図版8)

(1) 破片土器

Ⅰ群a類(6~8)

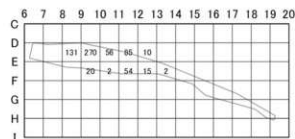
6・7は薄手で沈線文が施される。8は口縁部で、口唇部断面は丸形で、器面には貝殻押引文が施される。

Ⅰ群b類(9~14)

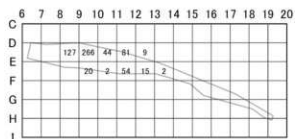
口縁部破片 9は15点が接合したもので、撻紐圧痕文とRL斜行縄文が施される。東銅路Ⅲ式である。10の口唇部断面は丸形で、羽状撻糸文が施される。11は口縁部で、横走する条が観察される。12の口唇部断面は丸形で、条は曲線的である。13はRLの短い条がみられ、回転が圧痕が施文方法が判断しがたい。14は薄手で、口唇部断面は丸形で、撻糸文は整然と施される。10~14は東銅路Ⅳ式である。

胴部破片(15~27) すべて東銅路式である。15・16は同一個体で、外面は撻り異なる原体を用いた撻糸文で、内面には条痕文が施され、東銅路Ⅱ式と判断される。17は別原体による羽状縄文が施される。18の縄文は、条に対して筋が左上がり、回転方向を変えたLR原体による施文である。19は羽

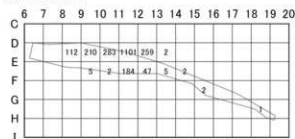
土器合計



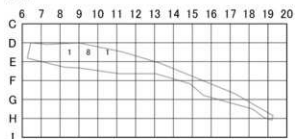
I 群



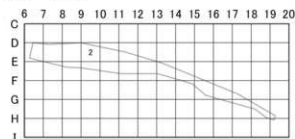
剥片石器合計



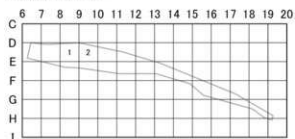
石鏃



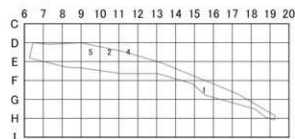
石槍・ナイフ



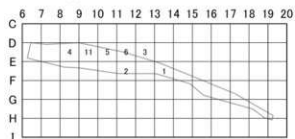
つまみ付きナイフ



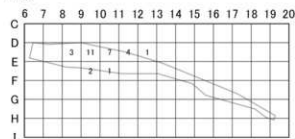
スクレイパー



U・Rフレイク



石核



フレイク

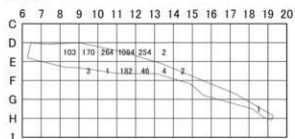
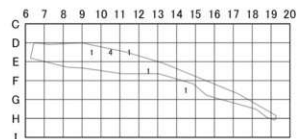
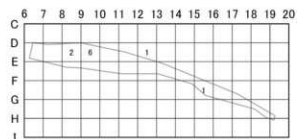


図16 遺物出土分布図(1)

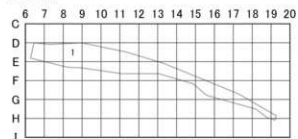
原石



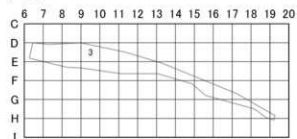
礫石器合計



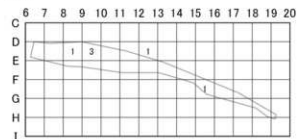
たたき石



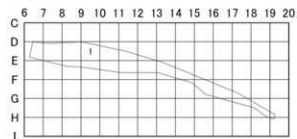
すり石



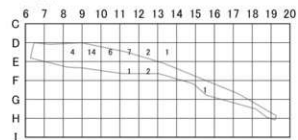
台石



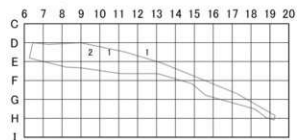
石製品



レキ合計



U・レキ



レキ (自然礫)

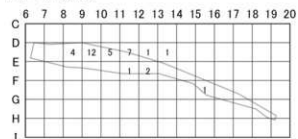


図17 遺物出土分布図(2)

状燃糸文と微隆起線文らしき文様がみられ、中茶路式の可能性がある。20は横走する曲線のな条が観察される。21は羽状燃糸文が施される。22の胎土は海綿骨針を多量に含む。23は器面に羽状燃糸文がみられる。24は包蔵地試掘調査出土で、絡条体圧痕文と燃糸文が施される。25はRの燃紐で巻が異なる原体による燃糸文である。26の文様は撚り戻しがみられ、矢羽根状を呈する部分がある。27はLの燃紐を並列させた原体である。

Ⅱ群b類 28は胎土に繊維を含む胴部で、縦走する燃糸文が施される。円筒土器下層式である。

3. 石器 (図18・19 表21 図版8・9)

(1) 剥片石器(図18・19 表21 図版8・9)

石鏃(1～6)

1は頁岩製の石鏃で、凹基で両側縁は曲線的である。2も頁岩製で下側を欠損し、腹面の基部側には広めの剥離痕がみられる。3は小球顆のある黒曜石製で、上側を欠損し、基部は非対称である。4も球顆のある黒曜石製で、四つの辺の長さが等しい菱形を呈する。5は白色のチャート製で、背面は左側に細長い剥離、右側は小さな剥離痕が密集し、両側縁は曲線的である。6は頁岩製で上側を欠損し、腹面は広めの剥離痕が目立つ。

石槍・ナイフ(7・8)

7は頁岩製で、腹面の加工は周縁のみである。素材剥片は湾曲し、上側を破損する。本器種に分類したが、つまみ付きナイフの可能性が高い。8は軟質の頁岩を素材とし、背腹両面には広めの剥離痕が目立つ。

つまみ付きナイフ(9～14)

9は頁岩製でやや幅広いもので、背面の全面と腹面のつまみ部付近と周縁に加工が施される。10は頁岩製でやや細身で、両側縁は直線的である。背面左側には細長い剥離が複数みられる。11は黒色の頁岩製で縦長剥片を素材とし、下端部は直線的な形状である。12は頁岩製で、背面の右側縁は中心付近から下側は直線的であり、折れ面に刃部を再生したと考えられる。13の石材は白色の頁岩で、つまみ部を除く形状は楕円形を呈する。14は頁岩製で腹面の加工は周縁に限られる。

スクレイパー(15～21)

15は打瘤の高まりが残る厚めの剥片を素材とする大型のもので、粗めの剥離が背面にみられる。16も厚めの剥片が素材で右側縁に刃部が作出され、上縁にかけて曲線的な形状である。17は黒色の頁岩製で背面に原礫面を残し、腹面には広い剥離面がみられる。18は側縁と下縁に刃部を設け、腹面の二次加工は周縁のみみられる。19は白色の頁岩製で、側縁と下縁に刃部が作出される。20は頁岩製の縦長素材で、下縁と腹面の右側縁に二次調整が施される。21は頁岩製で、下端側は背腹両面に二次加工がみられ、棒状の機能部を作出したとも推測され、石錐の可能性もある。

(2) 礫石器・石製品(図19 表21 図版9)

たつき石(22) 22は厚みのある楕円礫を素材とし、下端面に明瞭にくぼむたつき痕が観察される。

すり石(23～25) 23は楕円形の礫の下端面に機能部を有し、その周辺にみられる剥落痕は使用によるものと考えられる。24は厚みのある直方体の安山岩が素材で、下端が使用面と推測する。25は楕円形の安山岩を素材とし、下縁に平滑な使用面がみられる。

台石(26) 26は安山岩製ですり痕は不明瞭であるが、断面は使用により明確にくぼむ。

石製品(27) 27の石材は閃緑岩と考えられ、上端に抉りが2か所作出され、裏面は剥離する。

(吉田)

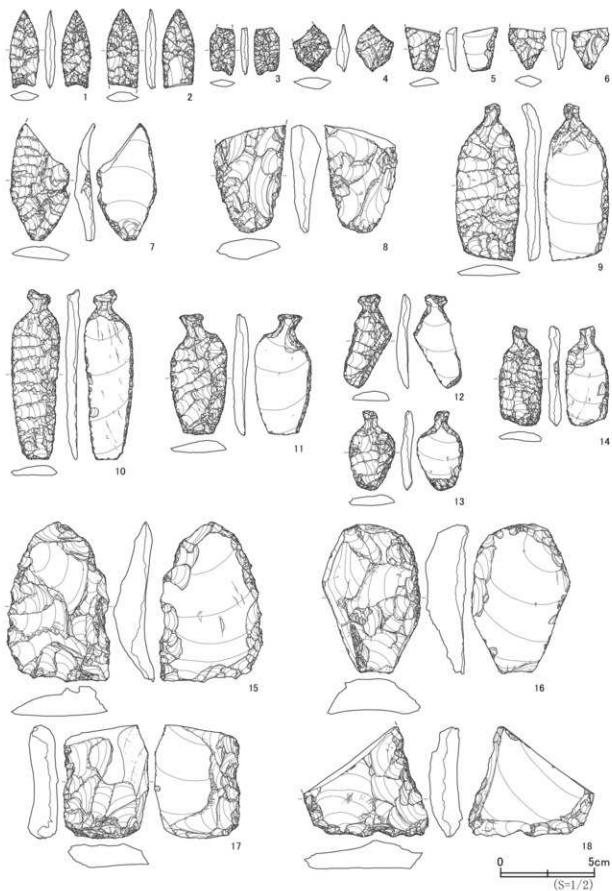
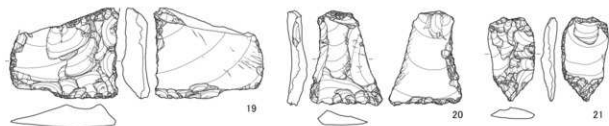
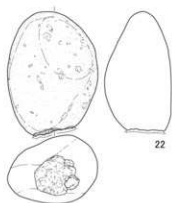


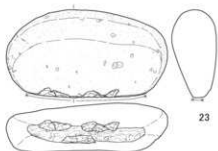
図18 包含層出土石器(1)



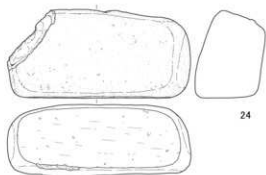
0 5cm
(S=1/2)



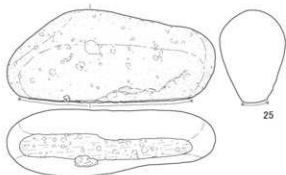
22



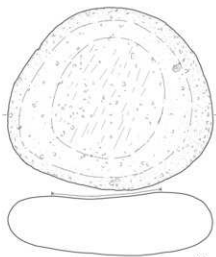
23



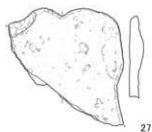
24



25



26



27

0 10cm
(S=1/3)

图19 包含层出土石器(2)

表18 包含層出土土器点数表

遺物種別 / 層位		I 層		II 層		III 層		その他		合計	
土器											
時期	部位	残存状態									
I 群	口縁部	良好	8	13	4	7	0	25	0	33	
		剝離						0			
		磨耗						0			
		小破片	1	4	3		8				
	底部	良好			1	1	0	1	0	1	
		剝離	0	0				0			
		磨耗						0			
		小破片						0			
	胴部	良好	54	147	144	262	1	346	1	586	
		剝離	2	6	8			16			
		磨耗		1				1			
		小破片	23	90	110			223			
	不明	良好				0		0	0	0	
		剝離	0	0				0			
		磨耗						0			
		小破片						0			
小計		88	261	270	1	620					
不明	口縁部	良好					0	0	0		
		剝離	0	0	0		0				
		磨耗								0	
		小破片								0	
	底部	良好				0		0	0	0	
		剝離	0	0				0			
		磨耗						0			
		小破片						0			
	胴部	良好		4		8		4	0	25	
		剝離	3					0			
		磨耗		3	14			3			
		小破片	3	7	8			18			
	不明	良好				0		0	0	0	
		剝離	0	0				0			
		磨耗						0			
		小破片						0			
小計		3	14	8	0	25					
合計		91	275	278	1	645					

表19 包含層出土石器点数表

器種名・分類 / 層位			I層		II層		III層		その他		合計		
器種	残存状態	岩石											
割片石器	石鏃	完形 頁岩	0		0	1	2		0	1	2	10	
		準完形 頁岩	1	2	1	1	2		0	2	5		
		半形 頁岩	1						0	1			
		片 チャート	0				2		0	1			
	(被熱)石鏃	半形 黒曜石	0		0	1	1		0	1			
	石棒・ナイフ	完形 頁岩					1			0	1		2
		準完形 頁岩	0		0		2		0	1			
		半形 頁岩					1		0	1			
	つまみ付きナイフ	完形 頁岩	0		1	3		2	3	0	5	6	6
		準完形 片	0				3		0	0	0		
		半形 片							0	0	0		
		片 片							0	0	0		
	スクレイパー	完形 頁岩	1		6				2	2	8	14	
		準完形 頁岩	1							1	1		
		半形 頁岩	2		2	7		3	3	2	5		
片 片									0	0			
U・Rフレイク	頁岩	6	6	9	11	15	15	1	1	31	33		
石核	頁岩	4	4	10	12	12	13	1	1	27	30		
	チャート	105		1,218	691	1				2,021			
フレイク	頁岩	2	108	19	1,249	16	718	2	9	39	2,084		
	チャート	1		12		11				24			
(被熱)フレイク	頁岩	6	6	18	18	16	17		40	41	41		
原石	頁岩	1	2	3	4		2		0	4	8		
	チャート	1		1	4		2		0	4			
小計			130		1,305		780		13		2,228		
礫石器	たたき石	完形 安山岩	1							1		1	
		準完形 片		1		0		0	0	0	0		
		半形 片								0	0		
		片 片								0	0		
	すり石	完形 安山岩	1		1				1		2	5	
		準完形 安山岩											
		半形 安山岩	0	1	0	1	1	1	1	2	1		
	台石	完形 安山岩					1				1	6	
		準完形 片								0	0		
		半形 片		2		2		2		0	0		
片 安山岩		1	2	2	2	1	1	0	4	5			
小計			4		3		3		2		12		
石製品	完形 片									0	1		
	準完形 片	0		1	1		0		0	0			
	半形 片			1					0	1			
小計			0		1		0		0		1		
レキ	U・Rレキ	完形 安山岩	0	0	1	1	2	1	1	1	2	4	
		片 チャート				1				1	1		
	(被熱)U・Rレキ	完形 安山岩	0		0		1	1		0	1	1	
	レキ	完形	安山岩	1		5		3			9	15	
			玄武岩	1							1		
			凝灰岩	2		1	7	2	6		0		3
			砂岩			1		1			1		1
		片	安山岩	2	5	5	17		8		0	1	30
			玄武岩			5						1	
			凝灰岩	3		3	10	1	2		0	2	
	(被熱)レキ	完形 砂岩	1		1						2	4	
片 チャート		0	1	0	0	1	0	3	0	4			
小計			6		19		13		1		39		
合計			140		1,328		796		16		2,280		

表20 包含層出土破片土器観察表

調査年度	調査区	出土地点	層位	取上日	遺物番号	破片数		破片部位	重量(g)	形状	分類	使用の痕跡		備考	
						小計	合計					内面	外面		内面
土器(器材)															
種類	形状・量	種類(名称)	外面	内面	(部位)	外面	内面	外面	内面	外面	内面	土器型式			
15 6 8	D-9区	笠原	0608	—	1	—	—	4.6	深鉢	1群a型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 7 8	D-9区	笠原	0608	—	1	—	—	4.3	深鉢	1群a型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 8 8	D-10区	笠原	0621	—	2	—	—	16.7	深鉢	1群a型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 9 8	D-9区	笠原	0517 0518 0517	— — —	3 4 1	—	—	48.2	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 10 8	D-9区	笠原	0606	—	1	—	—	2.6	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 11 8	D-11区	笠原	0530	—	3	—	—	18.2	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 12 8	D-10区	笠原	0612	—	1	—	—	11.8	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 13 8	D-10区	笠原	0529	—	1	—	—	6.7	深鉢	1群a型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 14 8	E-11区	笠原	0614	—	2	—	—	3.6	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 15 8	E-11区	笠原	0531	—	1	—	—	16.0	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 16 8	D-10区	笠原	0621	—	1	—	—	3.6	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 17 8	D-9区	笠原	0608	—	2	—	—	22.9	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 18 8	D-9区	笠原	0522	—	1	—	—	20.8	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 19 8	D-9区	笠原	0606	—	1	—	—	8.0	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 20 8	D-9区	笠原	0623 0608	— —	1 1	—	—	27.2	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 21 8	E-11区	笠原	0614 0621	— —	1 2	—	—	28.2	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 22 8	D-11区	笠原	0615	—	2	—	—	12.6	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 23 8	D-9区	笠原	0518	—	2	—	—	20.9	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 24 8	試掘調査-T6	農土	22102	—	1	—	—	27.1	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 25 8	D-9区	笠原	0608	—	1	—	—	12.0	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 26 8	D-10区	笠原	0612	—	1	—	—	21.9	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 27 8	D-9区	笠原	0608	—	1	—	—	8.9	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
15 28 8	D-10区	笠原	0625	—	1	—	—	12.6	深鉢	1群b型	—	—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			

表21 包含層出土石器観察表

原 番号	原層	出土地番	層位	期	活層 番号	点数	器種	特徴	特殊 状態	寸法 (cm)		重量 (g)	原石名	石質 特徴	加工値	使用痕	備考
										長さ	幅						
18 1	8	D-9区	I層	0523	—	1	石鏡	細片・即基	突起	4.1	1.6	5.2	頁岩	(灰色)	—	—	—
18 2	8	D-9区	I層	0523	—	1	石鏡	細片	突起	4.2	1.7	6.6	頁岩	黒褐色(10YR2/2)	—	—	下部欠損
18 3	8	D-9区	II層	0523	—	1	石鏡	細片・即基	突起	2.5	1.3	6.4	黒曜石	灰白色(5Y7/2)	—	—	上部・下部欠損
18 4	8	D-8区	I層	0517	—	1	石鏡	有葉・粗欠	突起	2.5	2.0	6.7	細砂岩	小斑 粗欠・粗欠	—	—	上部欠損
18 5	8	D-9区	II層	0517	—	1	石鏡	無葉	平坦	52.3	1.8	6.6	チャート	(白色)	—	—	上部欠損
18 6	8	D-10区	II層	0912	—	1	石鏡	細葉即子	突起	52.2	1.9	6.8	頁岩	(灰白色)	—	—	上部欠損
18 7	8	D-9区	II層	0606	—	1	石鏡	細葉即子 (上は付きナイフ)	突起	56.2	3.1	13.1	頁岩	粗灰色(7.5YR1/1)	—	—	一部欠損 両面中心磨材
18 8	8	D-9区	II層	0523	—	1	石鏡・ナイフ	細葉即子	突起	55.7	3.8	14.6	頁岩	粗灰 (灰色)	—	—	上部欠損
18 9	8	D-9区	II層	0615	—	1	つまみ付きナイフ	細長・正面磨製	突起	8.3	3.4	14.0	頁岩	埋灰黄色(2.5Y5/2)	—	—	—
18 10	8	D-9区	II層	0519	—	1	つまみ付きナイフ	細長・正面磨製	突起	9.0	3.1	6.8	頁岩	粗灰色(5YR4/1)	—	—	—
18 11	8	D-9区	II層	0623	—	1	つまみ付きナイフ	細長・正面磨製	突起	6.4	3.0	6.8	頁岩	オリーブ黄褐色(5Y5/1)	—	—	—
18 12	8	D-11区	II層	0601	—	1	つまみ付きナイフ	細長・正面磨製	突起	5.0	2.6	6.8	頁岩	灰黄褐色(10YR4/2)	—	—	右側面 方眼四角
18 13	8	D-8区	II層	0517	—	1	つまみ付きナイフ	細長・正面磨製	突起	4.2	2.4	6.7	頁岩	灰白 (灰白色(5Y7/1))	—	—	チャート質
18 14	8	D-12区	II層	0606	—	1	つまみ付きナイフ	細長・正面磨製	突起	5.3	2.3	6.7	頁岩	(埋灰)→ 埋灰黄色(10YR6/2)	—	—	中心の赤心磨材
18 15	9	D-11区	II層	0531	—	1	ヌケレイバー	サイド・エンド	突起	8.5	5.4	2.2	頁岩	灰黄褐色(10YR6/2)	—	—	—
18 16	9	D-9区	II層	0522	—	1	ヌケレイバー	サイド	突起	7.9	5.2	2.3	頁岩	灰色(5Y6/1) 磨製面	—	—	部分のある磨材
18 17	9	D-9区	II層	0519	—	1	ヌケレイバー	サイド・エンド	突起	6.0	4.5	1.6	頁岩	黒褐色(5YR3/1) 磨製面 (10YR1/1→2.5YR4/1)	—	—	一部欠損
18 18	9	D-11区	II層	0530	—	1	ヌケレイバー	サイド・エンド	平坦	55.0	6.6	1.8	頁岩	粗灰色	—	—	—
19 19	9	—	—	0512	—	1	ヌケレイバー	サイド・エンド	突起	4.8	5.8	1.5	頁岩	灰白(→灰色)	—	—	一次分製は先形
19 20	9	F-15区	I層	0616	—	1	ヌケレイバー	サイド・エンド	突起	5.0	3.9	1.1	頁岩	灰白(→粗灰色(10YR4/1))	—	—	—
19 21	9	D-10区	II層	0536	—	1	ヌケレイバー	サイド	突起	4.4	2.3	6.9	頁岩	灰色(→灰黄褐色(10YR7/2))	—	—	—
19 22	9	D-8区	I層	0517	—	1	たたま石	精肉部の下部に機能部	突起	9.9	7.2	5.4	頁岩	灰白(5Y7/2)	—	—	たたま石
19 23	9	D-9区	II層	0523	—	1	ナイフ石	精肉部の長辺に機能部	突起	7.0	12.8	3.9	頁岩	灰黄色(5Y7/2)	—	—	厚肉な平石面
19 24	9	—	—	0315	—	1	ナイフ石	長方形で機能部が広い	突起	7.1	14.6	5.7	頁岩	灰白(→灰色(10YR4/1))	—	—	厚肉な平石面
19 25	9	D-9区	I層	0516	—	1	ナイフ石	精肉部の長辺に機能部	突起	7.4	16.6	5.4	頁岩	灰(→灰白色)	—	—	厚肉な平石面
19 26	9	D-8区	II層	0606	—	1	ナイフ石	—	突起	14.5	16.3	5.0	頁岩	灰(→灰白色)	—	—	平石面
19 27	9	D-9区	II層	0523	—	1	石鏡類	—	平坦	9.3	9.1	1.1	頁岩	オリーブ灰色(5.5Y6/1)	くぼれ凹部	—	一部欠損

VI章 結 語

1. 黒曜石の原産地について (表 22 図版 9)

ト1は基部を欠損する石鏃で、球顆がない石材である。分析結果は赤井川産である。ト2の石鏃は先端部と基部を欠損し、小球顆が筋状にみられる。分析結果は赤井川産である。ト3はU・Rフレイクで、石材は白色の細い筋が複数みられ、小球顆の脱落痕がある。分析結果は赤井川産である。ト4は細長いフレイクで、原礫面はざらつく手触りで円形の脱落痕があり、石基は細粒の小球顆の筋が複数みられる。分析結果は赤井川産である。ト5のフレイクは、原礫面はざらつく手触りでくぼみがみられ、石基は筋状の小球顆が微量みられる。分析結果は赤井川産である。ト6は全体的に黄色味を帯び、球顆はみられない。分析結果は赤井川産である。

試料はすべて赤井川産との結果である。同原産地に特徴的な球顆が無い遺物もこの原産地と判断された。最も近い原産地は隣町の豊浦町豊泉であるが、これは粗粒の球顆が特徴で、肉眼で判断しやすいが本遺跡の遺物ではみられなかった。黒曜石製造物は合計 48 点と少なく、多くが赤井川産と推測される。(吉田)

表22 黒曜石原産地分析試料観察表

試料番号	器種	残存状態	石材	出土地点	層位	取上年月日	点数	計測値 (cm)			重量 (g)	時代	備考
								長さ	幅	厚さ			
ト1	石鏃	(準完形)	黒曜石	D-9区	III層	20230607	1	(2.3)	(0.4)	(0.2)	0.4	縄文時代早期	一次分析は「完形」
ト2	石鏃	(準完形)	黒曜石	D-9区	II層	20230523	1	(1.0)	(1.4)	(0.3)	0.8	縄文時代早期	
ト3	U・Rフレイク	—	黒曜石	D-9区	II層	20230518	1	2.3	4.3	1.6	3.9	縄文時代早期	
ト4	フレイク	—	黒曜石	D-8区	I層	20230516	1	5.5	1.8	1.9	7.2	縄文時代早期	
ト5	フレイク	—	黒曜石	D-8区	II層	20230523	1	3.9	2.0	0.7	1.9	縄文時代早期	
ト6	フレイク	—	黒曜石	D-9区	II層	20230519	1	1.2	0.9	0.2	0.1	縄文時代早期	
試料番号	原礫面		石基の特徴		遺物の決め手		産地予想		分析結果				
	部位	色調	特徴	特徴	特徴	特徴	特徴	特徴					
ト1	—	—	—	球顆なし 透明部分あり	球顆が黒いこと	赤井川ではない?	赤井川	赤井川					
ト2	—	—	—	小球顆 筋状 中量	小球顆	赤井川	赤井川	赤井川					
ト3	—	—	—	小球顆の脱落痕 白色の細い筋が複数	小球顆 筋	赤井川	赤井川	赤井川					
ト4	表面下側 右側面	—	直線的な筋 複数 ざらつき 円形の脱落痕	小球顆 細粒 筋状で複数 白色の筋	小球顆 原礫面の特徴	赤井川	赤井川	赤井川					
ト5	表面 左側・下側	—	直線的な筋 複数 無作あなくぼみ ざらつき	小球顆 微量 筋状	原礫面 小球顆	赤井川	赤井川	赤井川					
ト6	—	(黄灰色)	—	球顆なしあるいは極微量 透明部分あり	小球顆なし	赤井川でない?	赤井川	赤井川					

2. 寛文9年蝦夷の乱(シャクシャインの戦い)での長万部(追記)

令和2(2020)年度の調査報告書で、寛文9(1667)年の蝦夷の乱(シャクシャインの戦い)の時、国縫墓地がある台地は、松前軍が陣を構えた場所である可能性を述べた(北埋調報 366)。本年度この墓地に広がる豊野3遺跡の南側縁辺を調査することとなり、この戦いの痕跡が土中でみつかる可能性が十分に考えられた。現地表面直下の黄灰色火山灰は寛永17(1640)年に降下した駒ヶ岳d火山灰(Ko-d)で、蝦夷の乱の27年前であり、対象はI層の下位部分である。表土除去作業は慎重に立会し、火山灰が厚く残る部分は、重機での作業をKo-d層の直上までとし、土壌化が進んだ火山灰層を人力で調査したが、この戦いに関連する遺構や遺物はみつからなかった。文献からのアプローチとして、先述の報告書では『津軽一統志』に記された様子を述べた。今回は『日本庶民生活史料集成』(高倉新一郎

編 1969)に掲載の、松宮観山の『蝦夷談筆記 下』(394~400頁)、『蝦夷蜂起』「澁合利蝦夷蜂起に付出陣書」の写し(639~650頁)、則田安右衛門の『寛文拾年狄蜂起集書』(651~677頁)の三つの文献を取り上げ比較する。本文中の「くぬい」(国縫)、「もんべつ」(紋別川流域=中の沢・平里)、「おしやまんへ」(長万部市街)、「しずかり」(静狩)の地名がみられる文章を中心に解釈する。旧字体は新字体で記述し、現代語解釈は内容の理解に重点をおいたので、文法等の細かな間違いがあることを断っておく。

『蝦夷談筆記』下 松宮観山 宝永7(1710)年

・「シャグセンが手下のもの共共千斗シチリチヤマエンを大将にして、くぬい迄攻登り候。依之作左衛門はくぬいに城をかまへ、櫓を揚げ、くぬいの金堀共相添へ、五百人斗の人数にて相支へ申候」

⇒シャクシャインの手下、約2000人がシチリチヤマエンを大将とし国縫まで攻め上ってきた。そのため(蠣崎)作左衛門は国縫に城をかまえ、やぐらを建て、国縫の砂金工夫を伴い、約500人で協力して防衛した。

・「此由松前へ聞え候故、佐藤権左衛門其勢百五十人、松前儀左衛門其勢百五十人、新井田瀬兵衛其勢百三十人、其跡に惣大将八左衛門、追々にくぬいへ馳付けられ、作左衛門人数と取合千人餘にてくぬいの城を守る。」

⇒このことが松前城下へ伝わったので、佐藤権左衛門と兵120人、松前儀左衛門と兵150人、新井田瀬兵衛と兵130人、その後総大将の松前八左衛門泰広が次々と国縫に駆けつけて、蠣崎作左衛門の兵(500人)と合わせて約1000人(120+150+130+500=900)で国縫の城を守る。

・「シャグセンが者ども、彼城を焼賞にせんと巧みけれども、防ぎ堅固なるゆえ不叶、依之くぬい川を隔として相戦ふに、此川幅六、七間の小川にて、味方の勢雄砲二百挺斗表に並べ、透間もなく打出し候得ば、蝦夷人百人斗打たをされ候。夷共是に肝を消し、皆引色に見えしが、彼等も鎧を持、又は半弓にて毒矢を頻に射掛候得ども、尙は其足を着、金堀共は大方着込を着候故一本も通らず、朝より晝まで働いども候へども鐵砲に打立られ、不叶して山中へ逃匿候。」

⇒シャクシャインの手下が、この城(くぬいの城)を燃やそうと攻撃したが、防御が固くかなわないう、このため国縫川を挟んで戦うが、川幅が10.8~12.6m(一間=1.8mで計算)の小川で、松前軍は鉄砲200挺を並べ撃ち続けたので、アイヌ約100人が撃たれた。アイヌは肝を冷やし戦意を失ったが、槍を持ち、半弓で毒矢を頻繁にはなってきたが、武士は甲冑を着用、砂金工夫は厚く着込んでいたので、矢一本差さらない。朝から昼まで戦ったが、鉄砲に追い立てられ、山中に逃亡した。

・「打倒されしものをも、悉く取返し引取隠し申候故首をば一つも不取候。」

⇒撃たれた者や死体を、アイヌはすべて引き取って隠したので、首を一つも取れなかった。

・「依之城中静に兵糧をつかひ、川を渡りて面々敵を追ひかけ申候。此時は、先陣蠣崎作左衛門、二陣松前儀左衛門、三陣新井田瀬兵衛、四陣佐藤権左衛門、五陣惣大将松前八左衛門殿也。権左衛門は其時年七十四、五斗にして、威厳なる男也。」

⇒これにより、国縫にある城の中で静かに兵糧を食べて、国縫川を渡って、それぞれ敵を追いかけた。この時は、先陣(以下、省略)

・「くぬいより八、九里程奥のもうへつの内しつかり山といふ山へ敵逃匿り候を、一陣より五陣迄段々備を進め、一陣より相圖の貝をならし、惣勢一同に弓鐵砲をば止め、槍を以て濱ばたへ押り出し、悉く討取んと示し合せ、山の腰を押廻り相圖の貝を鳴し責上りし候所、此山中にしつかり川と申川有之候。」

⇒国縫から32~36km(一里=4km)ほど奥地(北東)の「紋別」地区にある「静狩山」に敵が逃げて籠っているのを、一陣から五陣で段々と進め、一陣より合図のほら貝を吹き、全員で一斉に弓と鉄砲での攻撃をやめ、槍でアイヌを浜辺へと狩り出して全員討ち取ろうと相談し、山の中腹を回ってほら貝を鳴らしながら攻め上った。この山中に「静狩川」という川がある。

・「此川へ彼蝦夷の奴原(蒙)トマ(海獸也。)などの如く飛入く(くの字点)、水中をくぐり川俣に逃去り、一人も見えず。其山の

下り口にて逃残りたる者ども纔に十六人、大将八左衛門殿手にて捕縛申候。」

⇒アイヌは静狩川へ飛び込んで、トドのように水中を潜って川俵いに逃げ去って、一人もみえない。静狩山の麓に逃げ残った者がわずか16人いて、大将八左衛門が捕まえた。

・「権左衛門足を見て、私一つの謀計有之間、此生捕を我等に御預被下候へと申預り、不残漏を解き、汝等命惜しくば案内仕れ。と申ければ、恐れおののき先に立て案内す。」

⇒権左衛門がこのことみて、私に一つの計略があります。これらの捕虜を私に預けてくださいと言つて預り、残らず縄をほどき、命がおしければ案内せよと言つたところ、恐れをなして先に歩き案内した。

・「彼等に従て鵜山深く進み行候處、もうへつの内おしやまんべと言大河あり。舟を悉く川向に引付け、夷の頭四十人程、惣人数千人斗ひかへたり。」

⇒彼らに従つて、なお山中深く進んだところ、紋別地区から内陸に長万部という大きな川がある。舟はすべて対岸にあり、アイヌの親分40人ほどと全員約1000人がひかえていた。

・「権左衛門これを見て、通事の勘左衛門に鐵砲を持たせ、小高き岩の上にかけて上げらせ、高聲に申させ候は、おのれらは狐狸の屬にて、勿體なくも松前家に敵對申さんとす。依之江戸より松前八左衛門大将にて大勢を是まで指下されたり。」

⇒権左衛門はこれを見て、通訳の勘左衛門に鉄砲をもたせ、やや高い岩に上がらせて、声高く言つた。おまれらはキツネやタヌキのようなもので、恐れ多くも松前藩に敵対している。このため、江戸より松前八左衛門大将が大軍を指揮してきた。

・「(大軍江戸よりは不來暫謀計の詞なり。)おのれらが預、髪の有奴原(蒙)をば火に入、水に隠るゝとも盡く尋出し、子々孫々まで一人も不残可打殺思召にて向せ給ふ。然共不便に存る間、若悪心をひるがえし降参仕候はゞ、其訴訟申上、命斗りを助け得さすべし。最前生捕し奴原(蒙)も早速切らるべきを某申し預りぬ。かくいへども猶も敵對せんと思わゞ、己等が放つ所の一矢、人間に立か立ぬか爰を射て見よ。」

⇒(大軍は江戸から来ないが、しばらく反乱の言葉を聞け。)おまえたちは、髪のあるやつら(男性)は、火に入り、水に隠れても全員見つけ出し、子孫まで残らず打殺すつもりである。しかし、私は不憚に思うこともあり、もし改心し降参するならば、訴えを上げて命は助けてやろう。さきほど生捕りした者も早速切つてよいと私は申し預かっている。ここまで言つてもなお敵對するのならば、おまえらの放つ矢が、人間に刺さるか刺さらないか、ここを射つてみる

・と大肌を抜に成りて胸をたたき目をいからせて呼びければ、蝦夷ども聞て、始て日本人の働きに気を消したる上、雲霞の大勢に驚き、江戸より御勢を向られたると云に驚き、一儀に不及鎧をぬぎ、掛刀をも打捨、頭分の者四十人、舟廿艘に取り乗り降参す。」

⇒と、裸になり胸をたたき目で威嚇して叫んだところ、アイヌは聞いて、初めて和人の動きに元気がなくなり、大軍に驚き、江戸からの軍勢に驚き、鎧をぬぎ、刀を捨てて、親分40人は舟20隻に乗って降参してきた。

・「権左衛門右の者共に打向ひ、能ぞ悪心をひるがへし降参せり。此上は、何分にも某御訴訟仕一人も殺すべからず、心安く存候へとて此旨八左衛門へ申上る。」

⇒権左衛門はアイヌの親分に向き合い、よく改心して降参したな。こうなつたら私は訴えて誰一人殺さないで、安心しなさい。このことは八左衛門に申し上げます。

・「八左衛門殿、権左衛門の謀を褒美被成、此上は川向へ我等渡り残黨を追討べし。其方は生捕共を召連郡纏へ歸り城を守候えと申給故、権左衛門は手勢五、六十人の生捕を引具しくんぬいへ歸る、此途中にていつより廻り候處、夷三百人斗前後より取まき聲を上る。」

⇒八左衛門は、権左衛門の作戦をほめ、これから(長万部)川の対岸に渡り、残黨を追いかける。そ

あなたは、捕虜をつれて国縫へ帰り城を守るようにいったので、権左衛門は50～60人の捕虜を連れて国縫へ帰ると、その道中でどこから回り込んだのか、アイヌ約300人が前後から挟み撃ちにしてきて声を上げた。

・「権左衛門を見、にくき奴原(蒙)かなとて又小高き所へかけ上り、「こりもなき奴原(蒙)我を見知らざるか。佐藤権左衛門生捕を召連て歸る道ぞ」と呼びければ、一矢をも射かけず平伏して通しける。暮に及びて城に入り、堅固に守る。惣じて夷人は重時の一食の時、上により五、六日も無食にても苦にせず。日本人は此戦中にも食事の間の速きにつかれし也。」

⇒権左衛門がこれをきいて、憎いやつらめと云って、やや高いところにあがり「懲りない奴らめ、私を知らないか、佐藤権左衛門が捕虜を連れての帰路である」と叫べば、矢は放たれず平伏して通した。夕方に国縫の城に入り、守りを固めた。多くのアイヌは昼食のみで、5～6日何も食わなくても平気である。和人はこの戦いの時も、食事までの時間が長いのに疲れている。

・「さて大将八左衛門殿はおしやまんべの川の渡を、降人の乗りたりし廿餘艘の船に打乗りて向へ渡り、悉(く)追討にして十六人迄討取り。此内十五人は此所に罟門に掛け、大将シチリチヤマエンが首斗を持せ、翌日くぬいへ歸り給ふ。」

⇒さて、大将八左衛門は、長万部川を、降伏したアイヌが乗った約20隻に乗って対岸に渡り、徹底的に追いかけて16人を討ち取った。このうち15人はこの場所で罟門台で晒し首にし、大将シチリチヤマエンの首を持って、翌日国縫に帰ってきた。

・「くぬいにて又手わけをして、権左衛門百三十人程の人数にて、惣軍より二日程先に行(以下、省略)」

⇒国縫にて再度、手分けして権左衛門は部下約130人で、軍本体よりも約二日(静内へと)先行した。

・「シャグゼンは諸島に手を付け、數萬の人数なり。然共商船の者の寝首を掻きたる斗にて、くぬいへ人数を出さしより滅亡に至るまで、日本人は壹人も損せず軍功逐られ候。」

⇒シャクシャインは北海道島に働きかけ、アイヌは数万の人数である。しかし、商船の船員を不意打ちしたくらいで、国縫へ出兵し反乱軍が滅亡するまで、和人は一人も死んでいない。

『蝦夷蜂起』(「渋谷利蝦夷蜂起に付陣書」の写し)

・「くぬい」に罷在候金壘を殺し、米、鹽、味噌を取兵糧に仕。」

⇒(アイヌは)国縫にいる砂金工夫を殺し、米、塩、味噌をうばって兵糧とし(松前を目指す計画)

・「廿三日くぬいと申所海陸間所御座候人数少々差遣、彼方の夷いかやう成議にて」

⇒6月23日、国縫という場所に陸・海の間所があるので、少数の人員を派遣し、遠くのアイヌがどのように動くのか

・「くぬいより味方夷度々差遣様子相尋申候へ共、」

⇒国縫から味方のアイヌをたびたび派遣し様子を探った

・「くぬいより二日路奥(えとも)と申所遠夷共切登り候由、七月廿五日松前へ申來候付、」

⇒国縫から奥地へ二日間の場所にある、えともという所(室蘭)まで、アイヌ勢は進んでいることが、7月25日松前に伝わったので、

・「八月朔日くぬいえ下着仕候。七月廿八日の夜より夷共方より押寄火をかけ放し可申と仕候へ共、此方夷、參候を存知合、火をかけられ不申候。毎夜八月三日の夜遠夷參候得共、天氣悪敷、川々通路不自由に御座候ゆへ出陣不仕候。」

⇒8月1日、(蠣崎藏人)が国縫へ到着した。7月28日の夜から、アイヌ勢が押し寄せ火を放つが、こちら側のアイヌも来るのを知っていたので、火はかけられなかった。毎夜、8月3日の夜までアイヌはやってきた。天気悪く、川を渡ることができないので出陣していない。

・「四日に「おしやまんべ」と申所へ参(り)夜(を)明(し)休息仕罷在候時分、彼人数差越候所、方々に壹人づつ夷付置、人数參候を先え知らせ申候故、皆々山中え引込申候。夷も矢を射懸け申候。此方よりも鐵炮打かけ少々手負も有之候得共、手負山中に引込四日には壹人も打留申者無御座候。」

⇒8月4日に長万部という場所へ行き、夜を明かし休息していた時に、少数を偵察にいかせたところ、あちこちにアイヌが一人ずつ見張りしており、和人が来たのを知らせたので、みんな山中へ引きこもった。アイヌも矢を射てきた、こちら側は鉄砲を撃ち少し(アイヌ側)に怪我人を出した。この負傷者は山中にこもり、この日(4日)は一人も撃ち取った者はいなかった。

・「**「しつかり**」と申所え小船にて参候。奥御座候て様子承り候處海際の道にて御座間自然四日には夜に入り奥共参り候も難計候に付、**「しつかり**」え罷越野陣仕候得共、壹人も不参候。」

⇒静狩という場所へ小船でいった。アイヌがいて様子を見ていた。海沿いの道にいたところ、4日の夜になった。アイヌが来ても見つけるのが難しいので、静狩で野営をしたが、(アイヌは)一人も来なかった。

・「(五日)に**「くぬい**」え罷歸り候中途に奥罷在、此方え矢射かけ申候に付、此方よりも鐵砲かけ、兩人打留申候。白(有珠)と申所の頭分の奥九人生捕申候。其外六人獲候にて相果申候。」

⇒8月5日に国縫への掃りにアイヌがいた。こちらへ矢をはなったので、当方も鉄砲を撃った。ともに攻撃をやめた。有珠(伊達)というところのアイヌ親分9名を生け捕りした。この他6名は鉄砲で撃たれて亡くなった。

・「奥山中へ引込置申候を**「しぶちり**」惣勢罷歸り申候節山中にて見出し申候。其外理置候者も可有御座候得共、味方相果申を殊の外隠密(に)仕ものにて御座候故、委様子不知れ不申候。其後奥共山中え引込申候故**「くぬい**」え晝八つ時に惣勢罷歸り申候。」

⇒アイヌが山中に引きこもり隠れるのを、静狩(静内の誤記)からの掃りの総勢が山中でみつけた。その他の隠れている者もいたが、味方の死を特に内密にしているようで、細かい様子を知ることができない。その後アイヌは山中に引きこもったので、国縫へ14～16時頃に(松前)軍勢は帰ってきた。

・「奥共廿五日の夜奥え引取申候。人間は居ながら、奥は旅がけにて兵糧等も不自由、其上鐵砲數度打懸候故何共存儲に備難成、味方大勢損じ可申候に付先引取相談致、追て手立可仕と申、皆々罷歸候由承候に付、奥共え惣勢罷越退治仕苦に相究、兵糧船**「くぬい**」より二日路龜田と申候に罷在候故呼に遣候得共、順風無御座、八月廿八日**「くぬい**」え兵糧舟罷越候。」

⇒アイヌたちは8月25日の夜に奥蝦夷地へ引き返した。和人は駐屯しているが、アイヌは旅の身で食料も不自由である。その上、鉄砲で何度も撃たれたら十分に動きがたい。(アイヌ方は)味方に大きな損害が出たので、先に引き返す相談をした。(松前側の)追っ手が用意されたというので、全員撤退することを承知した。奥蝦夷地へ松前全軍で移動し退治することになった。兵糧船は「国縫」から移動に二日間かかる亀田付近にあり、派遣できるが、風が良くなく、8月28日に兵糧船は国縫にきた。

・「一、松前八左衛門八月十日松前へ下着、十六日に立、廿一日**「くぬい**」へ下着、相談仕、**「くぬい**」九月四日に出發、奥蝦夷地へ罷歸候。」

⇒松前八左衛門は8月10日に松前に着き、16日に出發、21日に「国縫」に到着、相談し「国縫」を9月4日に船で出發し、奥蝦夷地へむかった。

・「一、同廿八日の夜**「くぬい**」買所ちやしえとばりを付、八月三日の夜迄毎夜参候。夜毎に鐵砲打申候。」

⇒7月28日の夜、国縫の会所・チャシに見張りを付けた。8月3日の夜まで毎夜アイヌがやってきた。夜ごとに鉄砲を撃った。

・「一、八月四日**「もん別**」と申所に敵奥罷在候由**「くぬい**」の者共承り合、雜兵六百人程にて押寄申候所、遠見付置此方より参候人数見付、山林へも、船にても逃申候故、夫より**「おしやまんへ**」、「**しつかり**」と申す所遠押寄、其内にて生捕拾人、當座突人打留申候。此外手負も御座候様子候得共、山林え引取敷知不申候。」

⇒8月4日に紋別(中の沢・平里)というところに敵のアイヌがいたので、国縫にいた者が兵約600人で進軍したところ、アイヌ側の見張りが遠くから見つけ、山林や船に乗って逃げてしまった。そこ

から長万部、静狩という場所まで進軍した。そこで生捕 10 人、2 人を射殺した。この他に負傷者もいる様子であったが、山中へ引きこもったので、数は不明である。

・「一、敵蝦夷人数三百四、五十人も参候様申候得共、山林へかくれ居申候事に候得様と知れ不申候。」

⇒敵のアイヌは人数 340～350 人やってきたようで、山林へ隠れたので明確な数字はわからない。

・「一、「くぬい」一戦の節、兵庫家来共備美共見届け、(略)」

⇒国縫での一戦の時、兵庫の家来がともに働くアイヌを見届け、(略)

・「一、「くぬい」一戦の節、(略)曰と申所の頭分の夷九人生捕申候。右生捕拾壹人内九人「くぬい」にて牢者(舎)申付候。」

⇒国縫での一戦、(略)有珠(伊達)というところの親分アイヌ 9 人を生け捕りし、このうち 9 人は国縫で牢にいられた。

・「一、(略)「くぬい」「しぶちやり」にても相果申候夷共可有御座候得共、死骸深く隠し置申ものに御座候故、未様子殿と相知不申候。」

⇒国縫と静狩(静内は誤記)で亡くなったアイヌがいるが、死体を跡形もなく隠すので、詳細はわからない。

・「一、「くぬい」より「しぶちやり」込討捨、生捕、手負、相果申候夷数七拾四人。」

⇒国縫から静狩(静内は誤記)まで討捨捨てた者、生け捕りにした者、負傷した者、亡くなった者、アイヌは 74 人である。

・「一、「くぬい」一戦の節、蠣崎藏人若黨壹人、新井田瀬兵衛若黨壹人、小荷駄馬子兩人毒矢に被射當申候。」

⇒国縫での戦いの時、蠣崎藏人と新井田瀬兵衛の若侍一人ずつ、荷物を積んだ馬の馬子に毒矢が射られ当たった。

・「(略)五月十一日に「くぬい」え帰り、(略)」⇒寛文 11 年 5 月 11 日に国縫に帰り、

・「(略)七月上旬に「くぬい」え罷越降参(略)」⇒(略) 7 月上旬に国縫へやってきて降参した(略)

・「一、くぬいより松前へ五日路御座候。浦川より「くぬい」え海陸海陸七日路御座候。五ヶ村の奥「たもち」より「くぬい」へ海陸共に十三日路程御座候御事。」

⇒国縫から松前へは五日間の行程である。浦河(元浦川)から国縫へは海路と陸路で 7 日間である。五つの村のさらに奥の「大樹」？から国縫へは海路と陸路で 13 日間である。

・「一、今度兵庫家来、侍貳拾人雑兵三百人餘「くぬい」へ差遣。」

⇒このたび、兵庫の家来、侍 20 人、兵 300 人ほどを国縫へ差し遣わせた。

・「(略)六月廿六日父子四人「くぬい」へ着、夷仕置申付、(略)」

⇒6 月 26 日父と息子四人が国縫に到着し、アイヌを仕置きした。

・「一、寛文九四年八月四日「おしまんべ」出陣。」⇒寛文 9 年 8 月 4 日長万部へ出陣。

『寛文拾年秋蜂起集書』 則田安右衛門

・「一、上ノ国より下の国へ山中通筋、嶋小巻堂里程手前瀬田内と申所よりくぬい二日程に参着申由。くぬい金山、瀬田内の川上にて金掘申候故、川傳にくぬい川上へ出て申候由。上地にては此筋成程近く、難所も無之、平地にて馬も通申候由。先年より蝦夷シヤマ通り筋にて御座候と申候。(略)」

⇒日本海側の上蝦夷地から太平洋側の下蝦夷地への山道がある。鳥牧の 1 里程手前のせたなというところから国縫までは約 2 日に到着する。国縫の金山(美利河)、せたなの上流で砂金を掘っているのので、川(後志利別川)伝いにいくと国縫川の上流に出るという。上蝦夷地では、ここは道の距離が近く、難所もなく平地で馬も通行できる。近年からアイヌ、和人が通る道である。

・「一、下の国より石狩へ陸地参所、おしまん(へ)、くぬい、うすより参候。」

⇒下蝦夷地から石狩へ陸地から行くと、長万部、国縫、伊達(有珠)を通る。

・「松前より三日路下もおしやまと申所にてほうそ相願申候てウタフ相果申候。」

⇒松前から三日の道のりの八雲町野田生(長万部は誤記)という場所で、天然痘にかかりウタフは亡くなった。

・「一、くんぬいにて去年金掘小や(屋)廻りに七月廿七日に櫓を付け申候。川の前にかた取候てつけ申候。其内に人数千人斗金ほり共に被指置候。しやく空間に登人宛番の者を付け置き、用心盛候所に、同廿八日の夜狄共しのび寄せ申候。川迎(向)より明櫓をかぶり、水に流れ参候。番の者とも是を見、ふしん(不審)に存、一度に鐵砲を打懸申候へば、狄共弓矢を捨て置き退(逃)け申候由。」

⇒国縫では昨年、砂金小屋の周囲に櫓を付け、7月27日には川に面している場所に取り付けた。その内部に約1000人の砂金工夫を配置した。約1間に1人の見張りを置いて用心していたところに、7月28日の夜、アイヌがこっそりやってきた。川の対岸から空の櫓をかぶり、水に流れて近づいた。見張りの者がこれを見て不審に思い、一斉に鉄砲で射撃したところ、アイヌは弓矢をおいて逃げ去った。

・「狄仁は、そこにて死候へ共、弓矢捨て置逃申者には無御座候由申候得共、不及是非に仕合にて捨て置可申と申候。鐵砲に當り死申候狄も御座候得共しかい(死骸)不残引取申候由。撰逃申候狄ども、頓に貳里斗下もをしまんへ、シツカリと申處へ参居り申候。」

⇒アイヌはそこで死んだので、弓矢を捨て置いて逃げた者はおらず、やむを得なく捨て置いたようである。鉄砲に当り死んだアイヌもあり、死体は残らず引き取られた。さて、逃げたアイヌたちは、素早く2里(約8km)離れた長万部、静狩という場所へ移動した。

・「八月十四日に六百人の人数を貳手におけ、打取可申由にて、蠣崎作左衛門山手先廻り、具を合申はづに約束仕、狄を跡先より取巻き責め置し可申由内談相終候得共、作左衛門何と仕候哉選り廻り、中途にて具を合せ申候故、狄是を聞き候て小船に乗り或は磯傳に皆々退(逃)け、登人も打留不申由申候事。」

⇒8月14日に600人の軍勢を二手に分け、攻撃することとし、蠣崎作左衛門が山中を先回りし、ホラ貝の合図を約束とし、アイヌを前後から囲って攻めようと内密に相談した。作左衛門はなぜか遅く回り、途中でホラ貝を合図したので、アイヌはこれを知り、小舟に乗り、あるいは浜辺に逃げたので、一人も撃ち取れなかった。

・「右の内貳百依程くんぬいへ被遣候。」

⇒右のうち、約200俵(60kg×200=12,000kg=12トン)をくんぬいへ送った。

・「一、八月廿五日に下ノ国くんぬいより金ほり松前へ参候て申候由、(略)」

⇒8月25日に下蝦夷地の国縫から砂金工夫が松前に来て話をした、(略)

・「其外は小筒八挺入の箱十四箱、外にくんぬい、上ノ国へ被遣候も御座候由。」

⇒そのほか小型の銃8挺が入った箱を14箱、くんぬい、上蝦夷地へ送った。

・「去年蜂起仕候狄共内談の事」

⇒昨年、蜂起したアイヌたちの相談事

・「一、松前より狄へ参候商舟は其通りに指置、先松前を焼破り責め置し可申中心懸仕松前へ参候處に、狄共中間にて登人申候は、くんぬいを其通り指置松前へ通り候て、自然くんぬい番處より勢もつゞきたてはさみ候ては如何に御座候間、くんぬい破り、御蔵の米取兵糧に仕、松前焼破り可申由申候へは、何も尤の由申候。」

⇒松前からアイヌ地へ来る商船はその地にとどめ、先に松前城下を火で攻め落とすために松前へ行くところに、中間地点でアイヌの一人が言うには、国縫を(攻撃せず)そのままにして松前にいく、国縫の番所から自然と続いてくる(後続の)アイヌ勢と松前軍を挟み撃ちにしたらどうか、国縫を陥落させ、貯蔵されている米を取って兵糧とし、松前城下の焼き討ちするのが最もよい。

・「其内松前よりくぬい御番處へ御人數がつまき、千三百人にかためて申候て子無之由。七月廿七日に番處しやく(糧?)を付け申候へは、同廿八日の晚秋共よせ申由なり。今二、三日松前勢つゞき不申候は(む)くぬいもやぶれ可申候由なり。」

⇒そのうち、松前からの国縫の御番所への増員が続く、1300人で守備を固めたが詳細はわからない。7月27日に番所に柵を設けたら、7月28日の晩にアイヌは攻撃してきた。この2〜3日で松前軍の増援が続かなければ、国縫は陥落したかもしれない。

・「内浦と申所のおとな、あいこういん、くぬいより上浦の惣おとな分に秋共用申候。あいこうい(ん)申上候は、我等事は御身方(味方)可申候。チャシ普請仕度候由申上候處に、松前より被仰付候は、左様ならばチャシ普請仕候。」

⇒噴火湾の西側地域の酋長のアイコウインは、国縫より上方(松前に近い地域)の漁村すべての首長アイヌに言った。アイコウインが申し上げたのは、私たちは松前の味方で、チャシ建築の仕度をするとといったところ、松前藩は、そうであればチャシを建築しろと命じた。

・「あいこういん奥意は、くぬいやぶり申候は身方(味方)の由申候てくぬいの人數此チャシへ入、おもいの儘に下秋共に申合せ打殺可申候仕候由申候。其証拠にはあいこういんは松前へトハリを付け申候由申候。」

⇒アイコウインの真意は、国縫が陥落した時は、味方であるというて、国縫の人員をこのチャシに入れ、思うがまま下蝦夷地(松前より遠い地域)のアイヌと話をし、(松前側を)打殺す覚悟をしていたといった。その証拠にアイコウインは松前に見張り(忍び)を付けていた。

・「一、あいこういん申分、くぬい破り申候は、下秋共に一味仕松前を責め申事手内の事可有御座候。(略)」

⇒アイコウインの言うには、国縫が陥落した場合は、下蝦夷地のアイヌの仲間になり、松前を攻める作戦であったとのこと。(略)

・「一、くぬい 川秋おとなばつふれ 入江糸さん迄海上二日、西風にて舟出す 青山弥二右衛門分」

⇒国縫 川がある アイヌ酋長バツフレ 恵山(函館市恵山町)の入江まで海路2日、西風で出港する。青山弥二右衛門の所有である。

・「一、もんへつ くぬいより一里 川 秋有 家五間斗 おとなよしま」

⇒紋別(中の沢・平里) 国縫から1里(4km) 川あり アイヌがいる 家屋5軒ほど 酋長ヨシマ

・「一、おしやまんへもんへつより一里、小川有 家五、六間斗 秋おとなあまり」

⇒長万部 紋別(中の沢・平里)より1里(4km)、小川あり、家屋5〜6軒ほど アイヌ酋長アマリ

・「一、しつかり 是より山越えすへ出る みちの間五里斗」

⇒静狩 ここから山越えで有珠(伊達市)へ至る 道のりは5里ばかり(約20km)

・「一、同所より くぬいへ三日 由(油)断仕候へは三日に成兼候由」

⇒同所(松前)より国縫へ三日かかる 油断すれば三日以上になることもある。

・「一、すつかり、くぬいへ通筋はすつ川上へ登申候得ばくぬい川川上入違ひ流申、其合越し申由。山中平地にて根落立候なり。成程足場能御座候由」

⇒静狩、長万部(国縫は誤記)への道筋は、寿都川(朱太川)を上流に登れば、長万部川(国縫川は誤記)の上流部が反対方向に流れている。その間を越えていく。山中は平坦地で根が落ちており、なるほど足場がよい。

・「一、日中又は二日にも通申由、馬足も自由にて瀬田内より越申候も瀬田内の川上へのぼり、右の所をくぬいへ出て申候由。くぬい金掘る山は瀬田内川上にて廻り申候由申候。シヤモ秋先年より通筋にて、道も御座候由申候。難所も餘り無御座候由申候。くぬい金山は馬足成程自由に通申由申候事。」

⇒日中または二日にも通ったので、馬での行き来は自由で、せたなから越えていく場合は、瀬田内川(後志利別川)を上流に登り、右の流れをいくと国縫に出る。国縫の金掘る山(カニカン岳)へはさらに瀬田内川(後志利別川)上流に登る。和人・アイヌが昨年から通るルートで道もある。難所もあまり

無い。国縫の金山(美利河)までは馬で自由に通れる。

考察

『津軽一統志』を含めこれらの文献には地名「くぬい」が頻りにみられる。当時、この地名は国縫川流域の広い範囲に付されていたと考えられる。すなわち「クンネ井砂金御役所」や砂金採掘場所があった今金町美利河から国縫川河口近くの長万部町国縫までである。「くぬい」に所在する松前藩の建物についての記載内容を書き出す。

『津軽一統志』での記載(北埋調報 366 118～119 頁)

- 「一、くぬいにおゐて、備場可陣取場所(略)絵図御座候事。」
- 国縫に備場や陣取場所はない、絵図に描かれたクンネ井砂金御役所は、今金町美利河である。
- 「くぬいにては金堀小屋の廻り柵を付、(略)」
- 砂金御役所の周囲に柵を設けとあり、場所は今金町美利河である。
- 「一、下はくぬい 龜田両所、(略)」
- 太平洋側(下蝦夷地)の国縫と亀田で松前城下町へ至る道を守るので、長万部町国縫である。
- 「一、七月廿八日の夜くぬい要害の所へ(略)」
- 「要害」とは地形がけわしく守りに有利な場所のことで、長万部町国縫に設けた守備陣地と考えられる。

本文献では、「金堀小屋」は今金町美利河にある砂金御役所、「要害の所」は長万部町国縫の守備陣地と考えられ、両地域は書き分けられている。

『蝦夷談筆記』下での記載

- 「くぬいに城をかまへ、柵を揚げ」・「くぬいの城」
- 国縫に城を構える、やぐらを建てる、くぬいの城とあるが、両地域には城郭と呼ぶべき施設はななく誇張表現である。

本文献は、今金町美利河の砂金御役所の記載が全く無く、「くぬい」は、すべて海岸沿いの長万部町国縫と解釈するしかない。また国縫川を挟んで両軍勢が対峙したと記された唯一の記録である。

『蝦夷蜂起』(『洪舎利蝦夷蜂起に付論書』の写し)での記載

- 「廿三日「くぬい」と申所海陸開所御座候(略)」
- 国縫に陸も海も開所はないが、松前藩の施設である砂金御役所のことと解釈できる。
- 「一、同廿八日の夜「くぬい」買所ちやしえとばりを付、(略)」
- 国縫の会所(買所)は美利河の砂金御役所、チャシは長万部町国縫の防御陣地で二つの地点を記していると解することができる。
- 「「くぬい」にて牢者(舎)申付候。」
- 牢屋に身柄を拘束したとある。牢が備えられている可能性が高いのは砂金御役所である。

本文献では、「閑所」・「買所」は今金町美利河にある砂金御役所、「チャシ」は長万部町国縫の防御陣地を表しており、書き分けている可能性がある。

『寛文拾年秋蜂起集書』則田安右衛門での記載

- 「一、くぬいにて去年金堀小や(堀)廻りに(略)」
- 昨年、国縫の砂金御役所の周囲に柵を付けたとあり、今金町美利河である。
- 「(略)くぬい番處より勢(略)、くぬい破り、御藏の米取兵糧(略)」
- アイヌ側の戦闘計画で、奪う目的の米が貯蔵されている番所は砂金御役所で、「くぬい破り」とは今金町美利河にある国縫砂金御役所を陥落させることであろう。

●「(略)くぬい御番處へ御人数がつゞき、(略)くぬいもやぶれ(略)」

→国縫の砂金御役所に兵が増員され、国縫が陥落とあり、前文同様、場所は今金町美利河である。

●「(略)チャシ普請仕度候由申上統處に(略)、松前より被仰付候は、左様ならばチャシ普請仕候。」

→チャシを造る準備を手伝うと申し上げたら、チャシを構築せよと言われた。この「チャシ」とは守備陣地のことで、長万部町国縫である。

●「(略)くぬいやぶり(略)くぬいの人數此チャシへ入、(略)」

→国縫が陥落したら、国縫にいる人員はこのチャシに入るとある。陥落に付して記される国縫は今金町美利河で、チャシは長万部町国縫の防御陣地である。

本文献では、「(御)番所」、「破れ」と併記された「国縫」は本拠地の今金町美利河の砂金御役所で、「チャシ」が長万部町国縫の防御陣地と解するのが自然で、書き分けていると思われる。

以上とめる。松前藩の国縫防御の本拠地は今金町美利河にあったクネ井砂金御役所で、ここに防御の柵を設置した。これは「金堀小屋」、「関所」、「買所」、「番所」と記されている。一方、松前城下町への道を守備した場所は長万部町国縫で、現地形を利用して守備陣地(くぬい要害の地)を設け、これは「チャシ」とも表記されている。周知の包蔵地では、長万部町国縫から今金町美利河方面に向かう山間部、国縫川の右岸の標高 161.4m の山頂付近に国縫チャシ(登載番号: 7)がある。これは文献にチャシと記載があることを根拠に存在を想定し、無理にこの場所に定めた可能性がある。もう一つ詳細不明な遺跡で国縫遺跡(登載番号: 32)があるが、この立地は標高 125m の坊主山の麓の平坦な高台(四等三角点「円通寺」付近)であるが、この場所は北からのアイヌ勢の進行を見張ると同時に、砂金御役所がある美利河方面とをつなぐ道の安全確保を同時に行うのに適した場所である。これらの場所を遺跡とした根拠を明らかにすることが求められる。また、国縫川をはさんで両軍勢が相対したと記載があるのは一文献のみで、これは河口の流れが直線であることを前提としていよう。旧版図では同川の河口付近は蛇行し、かつ茂訓縫川と合流して海に流れ込み、ドローン写真では、国縫墓地の南側の低地に曲線的に蛇行する旧河道の跡がみとれる(図録 1)。これらの四つの文献を比較した結果、『津軽一統志』が史実を一番忠実に伝えていると考えられる。(末光)

表23 寛文9年蝦夷の乱の文献対比

津軽一統志	月	日	蝦夷 取巻記	蝦夷降参 (津会利蝦夷降参記に付取巻記)の写し	寛文9年取巻記原書
テメンバ河川に御番を遣り日本高取一舟敷	6	11	---	---	---
---		14	---	人入が御付たる	---
千歳で船が動かぬに於て船に上り		22	---	御勢の船に於て自來アイヌの船に上り	---
磯崎の山麓に於ては、御番御番兵御勢の士、 砂金より御入の御船一舟敷	7	25	---	---	---
---		26	---	アイヌ軍勢の御船より御入の船に上り	---
---	7/28~8/3	27	---	---	---
船中の御入の船に御番一國縫で御勢を遣りアイヌ二人を御勢		28	---	---	國縫の御番中船の船に御勢を遣り
---		---	---	---	アイヌの船に御入の船に上り
國縫で御勢を遣り		---	---	---	---
---	8	1	---	---	---
---		3	---	---	---
御勢の御入の船に御番一國縫で御勢を遣りアイヌ二人を御勢		4	---	自らの ある記述 無し	---
---		5	---	---	---
---	9	9	---	---	---
---		10	---	---	---
---		14	---	---	---
---		16	---	---	---
---		21	---	---	---
---		25	---	---	---
---		28	---	---	---
テメンバを獲るとして御勢の御入の船に御勢を遣り 國縫の御入の船に御勢を遣りアイヌの御入の船に御勢を遣り	9	3	---	---	---
---		4	---	---	---
---		---	---	---	---
---		---	---	---	---

付篇 1. 豊野 3 遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展

1. はじめに

長万部町字豊野に所在する豊野 3 遺跡から出土した縄文時代早期の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、遺跡より出土した黒曜石製石器 6 点である (表 1)。時期は、縄文時代早期とみられている。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

表 1 分析対象

分析 No.	器種	残存状態	出土地点	層位	取上年月日	時代	法量 (cm, g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
t1	石鏃	完形	D-9区	III層	20230607	縄文時代早期	(2.3)	(0.6)	(0.2)	0.4	準完形
t2	石鏃	準完形	D-9区	II層	20230523	縄文時代早期	(1.0)	(1.4)	(0.3)	0.8	
t3	U-Rフレイク	—	D-9区	II層	20230518	縄文時代早期	2.3	4.3	1.6	8.9	
t4	フレイク	—	D-8区	I層	20230516	縄文時代早期	5.5	1.8	1.9	7.2	原産面
t5	フレイク	—	D-10区	II層	20230523	縄文時代早期	3.9	2.0	0.7	1.9	原産面
t6	フレイク	—	D-9区	II層	20230519	縄文時代早期	1.2	0.9	0.2	0.1	

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管ターゲットはロジウム (Rh)、X 線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径 8 mm、電圧 50kV、電流 1000 μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光 X 線分析による X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた (望月, 1999 など)。本方法では、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps : count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$



図1 黒曜石産地分布図 (東日本)

4) log(Fe 強度/K 強度)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸 Rb 分率-縦軸 Mn 強度×100/Fe 強度)の判別図と横軸 Sr 分率-縦軸 log(Fe 強度/K 強度)の判別図を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせることで指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe 強度/K 強度)の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、6点いずれも赤井川群(北海道、赤井川エリア)の範囲にプロットされた。

図2、3の判別図では、赤井川群と上土幌群の一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そのため、以下に示す Y 分率を算出している。

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢遺跡(15)
		白滝2	7の沢川支流(2)、IK遺跡(10)、十勝石沢遺跡下河床(11)、アンサイの滝遺跡(10)
	赤井川	赤井川	黒川-土木川(24)
	上土幌	上土幌	十勝三股(4)、タクシュベツ川右岸(42)、タクシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)
	釧路	釧路山	釧路山(5)
	釧路	西山	西山(5)
	釧路	豊浦	豊浦(10)
	旭川	旭川	近文台(8)、雨割台(2)
	名寄	名寄	忠烈台(19)
	秋田	秋父別	秋父別1
	秋父別2	秋父別2	
	秋父別3	秋父別3	
	遠軽	遠軽	北名瀬川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
	留辺蘂	留辺蘂1	
		留辺蘂2	
		ケシヨマップ川河床(9)	
青森	青森	青森	青森
	青森	八森山	八森山(15)、鶴ヶ坂(10)
	青森	青森	田内川(6)
	青森	青森	岡崎沢(7)、八森山公園(8)
	青森	青森	天田内川(6)
秋田	男鹿	男鹿	金ヶ崎 金ヶ崎温泉(10)
	男鹿	男鹿	基本海岸(4)
岩手	北上川	北上川	北上川(9)、真城(33)
	宮崎	宮崎	湯ノ倉(40)
	色麻	色麻	根岸(40)
宮城	仙台	仙台	秋保1 土蔵(18)
	仙台	仙台	秋保2 土蔵(18)
山形	羽前	羽前	月山 月山荘前(24)、大崎荘(10)
	羽前	羽前	たらのき代(19)
新潟	新津	新津	板山 板山牧場(10)
	新津	新津	金津(7)
栃木	高野山	高野山	甘湯沢 甘湯沢(22)
	高野山	高野山	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
	高野山	高野山	新御座 芙蓉パークライト土砂集積場(30)
	高野山	高野山	廣山 廣山(14)、東御座(54)
	高野山	高野山	小深沢 小深沢(42)
	高野山	高野山	土屋橋1 土屋橋西(10)
	高野山	高野山	土屋橋2 和和田トンネル北(20)、土屋橋北西(50)、土屋橋西(1)
	高野山	高野山	古峠 和和田トンネル上(28)、古峠(38)、和和田スキー場(28)
	高野山	高野山	ブドウ沢 ブドウ沢(20)
	高野山	高野山	牧ヶ沢 牧ヶ沢下(20)
長野	諏訪	高松沢	高松沢(19)
	諏訪	屋ヶ塔	屋ヶ塔(35)、屋ヶ塔(20)
	諏訪	冷山	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)
	諏訪	戸ノ瀨	戸ノ瀨(20)
	諏訪	戸ノ瀨	戸ノ瀨(51)
神奈川	箱根	箱根	箱根(20)
	箱根	箱根	箱根(20)
静岡	天城	天城	上多賀(20)
	天城	天城	上多賀(20)
東京	神津島	神津島	神津島(27)
	神津島	神津島	神津島(20)
島根	隠岐	隠岐	久見 久見パークライト中(6)、久見龍虎場(5)
	隠岐	隠岐	荒瀬 荒瀬海岸(3)、加度(4)、岸底(3)

表3 測定値および産地推定結果

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log ₁₀ K/Y	Y分率	判別群	エリア	分析 No.
11	283.9	99.0	1820.8	818.2	386.3	413.6	869.0	32.90	5.44	15.53	0.81	16.63	赤井川	赤井川	11
12	339.0	117.0	2102.3	929.9	438.8	473.1	1012.5	32.58	5.57	15.37	0.79	16.57	赤井川	赤井川	12
13	224.2	74.8	1378.6	557.9	258.4	277.6	602.7	32.89	5.42	15.23	0.79	16.36	赤井川	赤井川	13
14	185.9	61.2	1132.2	508.5	237.0	256.3	536.5	33.05	5.40	15.41	0.78	16.66	赤井川	赤井川	14
15	221.7	76.7	1410.4	580.1	268.3	289.8	610.6	33.17	5.44	15.34	0.80	16.57	赤井川	赤井川	15
16	245.6	84.5	1605.9	681.4	315.7	337.3	702.6	33.45	5.26	15.50	0.82	16.56	赤井川	赤井川	16

$$Y \text{ 分率} = Y \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$$

赤井川群と上土幌群、上土幌群と一部重複のある青森群の原石および石器について、横軸 Y 分率、縦軸 Mn 強度×100/Fe 強度をプロットした判別図を図 4 に示す。図 4 でも、6 点すべてが赤井川群の範囲にプロットされた。

表 3 に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。今回分析した石器は、すべて赤井川産であった。

4. おわりに

豊野 3 遺跡より出土した黒曜石製石器 6 点について、蛍光 X 線分析による産地推定を行った結果、6 点とも赤井川エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦 (1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育局編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育局.

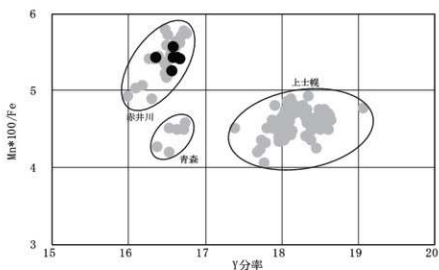


図 4 黒曜石産地推定判別図 (3)

(令和 5 年 12 月 18 日受領 内容点検 吉田)

付篇 2. 火山灰同定（豊野 3 遺跡）

アースサイエンス株式会社
分析 古澤 明（(株)古澤地質）
テフラ同定 古澤 明 加藤孝幸

1. 分析方法

(1) 前処理

古澤(2003)の方法を基本に前処理を行った。はじめにナイロン製使い捨て#255 メッシュシート(糸径 43 μm , オープニングワイド 57 μm)を用い、流水中で洗浄した。残砂を#125 メッシュシート(糸径 70 μm , オープニングワイド 133 μm)を用い水中で篩い分けした。これにより 1/8~1/16mm に粒度調整した試料を超音波洗浄機を用いて洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。

(2) 粒子組成分析用薄片作成

鉱物観察用スライドガラスの上に硬化後屈折率が 1.545 程度となる光硬化樹脂を載せ、この樹脂に上記洗浄・篩い分けを行った試料を攪拌・封入させ、カバーガラスで覆い粒子組成観察用薄片を作成した。樹脂の屈折率を 1.545 とする目的は石英や長石類の識別にある。

(3) 検鏡（粒子組成分析）方法

前処理・プレバレートされた粒子は偏光顕微鏡(100 倍)を用いて観察し、300 粒子(1000 粒子の平均値)を古澤(2003)の区分手法に準じ、火山ガラス、長石類・石英、直方輝石(斜方輝石)、単斜輝石、普通角閃石、カミングトン閃石、その他の重鉱物(カンラン石、ジルコンなど)、不透明鉱物、火山岩片、スコリアおよび岩片・風化粒に区分した。また、微斑晶をガラスが充填する無発泡粒子を「微斑晶多量含有無発泡ガラス」として区分した。火山ガラスは発泡跡の大きさにより、発泡跡が 0.1mm 四方に 2~3 個以内しかみられない大きな発泡を有するバブルウォールタイプ(Bw)、発泡跡が 0.1mm 四方に 4 個以上見られるバミスタイプ(Pm)、発泡跡同士が密着せずガラス中に細かい泡となって含まれるか全く含まれない急冷タイプ(O)の 3 タイプに区分した。また、重鉱物組成については、必要に応じて 100 粒子を目処に、直方輝石、単斜輝石、普通角閃石、黒雲母、その他(不透明鉱物、ジルコン、アバタイト etc.)に区分し、粒子組成とは別に記載した。

(4) 屈折率測定方法

測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置“^{マイオット}MAIOT”を使用した。測定精度は火山ガラスで ± 0.0001 程度である(古澤, 1995)。

顕微鏡は、ニコン顕微鏡 ECLIPSE600 シリーズ(偏光・位相差装置付)、位相差用対物レンズ(10 倍および長作動 20 倍)、光源は 12V100W ハロゲンランプ、全誘電体干渉フィルター(589.3nm)を使用した。温度変化装置として全面等温度透明加温板(0.1℃の精度で制御可能)、プログラム温度コントローラー(0.1℃の精度で測定可能)、高感度熱電対(0.1℃の精度で測定可能)、パーソナルコンピューターを使

用した。

以下に測定の手順を示す。

顕微鏡ステージ上に設置した加温板に、浸液と試料および熱電対とを密封したごく薄いカプセルを載せる。カプセルは、大きさ 18×24mm、厚さ 0.12~0.17mm のガラス板(下板)と、直径 18mm で同じ厚さのガラス板(上板)との間に、熱伝導性の高いシーリング材を使用して浸液と試料および熱電対を密封したもので、総厚が 0.5~0.6mm 程度である。浸液は単一化学式を有する有機化学合成液である。つぎに、加温板の温度を制御して、ほぼ一定の温度変化速度で、浸液および試料の温度を室温~60℃の範囲で変化させる。この様子を位相差状態の顕微鏡で観察する。観察時の波長はナトリウム D 線(589.3nm)である。この画像を観察しながら、ガラスの輪郭が消失する温度を記録する。実際には温度上昇あるいは下降時に 1 回パーソナルコンピューターに接続されたマウスを左クリックする。屈折率は、あらかじめ作成した各浸液の温度と屈折率との一次式から変換され、パーソナルコンピューターに記録される。測定個数の目処はガラスが 30 片、直方輝石が 10 片である。ただし、値にバラツキがある試料では、モードを把握できるまで測定する。記録された屈折率、熱伝対の温度データはリアルタイムにパーソナルコンピューターに入力され、温度、測定個数などとともに屈折率ヒストグラムとしてモニターに表示される。

2. 分析結果

粒子組成分析結果を表 1 に、火山ガラスおよび直方輝石の屈折率測定結果を表 2 に示す。屈折率の個々の測定値は末尾の付図「屈折率測定結果」に示した。

表 1 粒子組成分析結果

試料名	Volcanic Glass			Light Mineral		Heavy Mineral								Rock	V.Rock	Total	特記事項
	Bw	Pm	O	Fl-Qu	Opx	Cpx	Gho	Cum	BaHo	Ap	Bi	Opq					
No.1 T3-01	0	216	0	50	13	3	0	0	0	0	0	0	18	0	0	300	H.M. Opx>Cpx

Bw: バブルウォールタイプ
 Pm: バミスタイプ
 O: 低発泡タイプ
 Fl-Qu: 長石・石英
 Opx: 直方輝石
 Cpx: 単斜輝石
 Gho: 緑色普通角閃石
 Cum: カミングトン閃石
 BaHo: 酸化角閃石
 Ap: 燐灰石
 Bi: 黒雲母
 Opq: 不透明鉱物
 Rock: 岩片・風化粒
 V.Rock: 火山岩片
 H.M.: 重鉱物組成

表 2 火山ガラスおよび直方輝石の屈折率分析結果

試料名	火山ガラスの屈折率	直方輝石の屈折率	テフラ名
No.1 T3-01	1.505-1.516(mode : 1.505-1.511)	1.710-1.714	Ko-d

試料 T3-01 は表 1 によれば、バミスタイプ火山ガラスを主体とする。有色鉱物としては直方輝石を多く含み、単斜輝石も含まれる。

また、表 2 によれば火山ガラスの屈折率はモード 1.505-1.511、直方輝石の屈折率(γ)は 1.710-1.714 である。

3. テフラ (No.1 T3-01) の対比

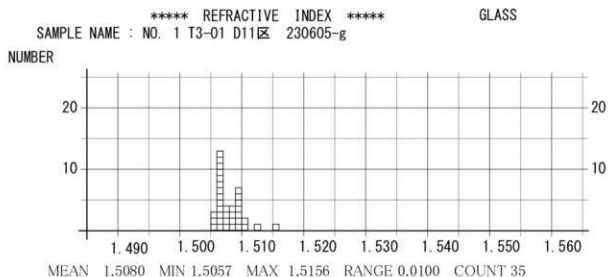
本試料はバミスタイプ火山ガラスを主体とし、有色鉱物としては直方輝石および単斜輝石を含み、火山ガラスの屈折率がモード 1.505-1.511, 直方輝石の屈折率(γ)が 1.710-1.714 である特徴は、駒ヶ岳起源 Ko-d テフラの特徴(町田・新井, 2003)と一致する。本試料は Ko-d テフラに対比できる。

引用文献

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 2, 123-133.
- 古澤 明, 2003, 洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別. 地質学雑誌, 109, 1, 1-19.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラスー日本列島とその周辺, 336p, 東京大学出版会.

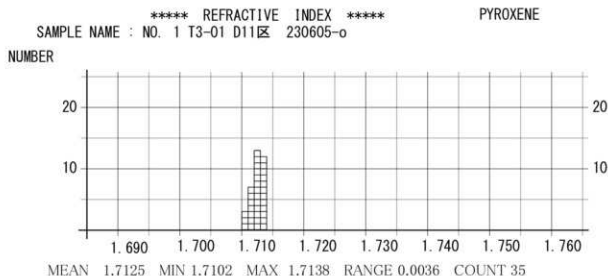
(令和5年10月24日受領 内容点検 吉田)

付図 屈折率測定結果 (GLASS : 火山ガラス、PYROXENE : 直方輝石)



DATA LIST

1.5128	1.5098	1.5082	1.5076	1.5064	1.5083	1.5103	1.5072
1.5071	1.5076	1.5093	1.5096	1.5100	1.5062	1.5057	1.5062
1.5063	1.5061	1.5062	1.5064	1.5086	1.5093	1.5094	1.5098
1.5099	1.5089	1.5070	1.5064	1.5060	1.5059	1.5064	1.5068
1.5067	1.5067	1.5156					



DATA LIST

1.7132	1.7123	1.7120	1.7126	1.7135	1.7114	1.7113	1.7102
1.7111	1.7124	1.7117	1.7115	1.7132	1.7130	1.7128	1.7106
1.7111	1.7133	1.7128	1.7127	1.7131	1.7138	1.7130	1.7116
1.7108	1.7134	1.7125	1.7123	1.7128	1.7132	1.7137	1.7128
1.7134	1.7133	1.7137					

写 真 图 版



俯瞰



E-W

調査前状況

図版 2



調査区全景 俯瞰



基本土層 (11N 杭南西面) SW → NE



基本土層 (10N 杭南西面) SW → NE



基本土層 (D11 区) S → N

調査区と基本土層



PS-1 検出状況 SE→NW



PS-3 検出状況 NE→SW



PS-2 検出状況 SW→NE



PS-2 検出状況 NW→SE



FC-1 検出作業 SW→NE

図版 4



調査状況 S→N



調査状況 NW→SE



遺物検出作業 NE→SW



調査状況 W→E

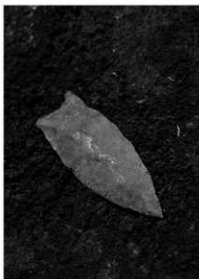


調査状況 E→W

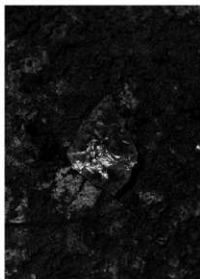
包含層の調査



土器 (D9区) NW→SE



石鏃 (D9区) N→S



石鏃 (D9区) NE→SW



つまみ付きナイフ (D9区) SW→NE



つまみ付きナイフ (D9区) SW→NE



つまみ付きナイフ (D9区) NW→SE



つまみ付きナイフ (D11区) E→W



スクレイパー (D9区) E→W



スクレイパー (D11区) SE→NW

包含層遺物出土状況

図版 6



調査状況 W→E



土層断面 (14S 杭) W→E



土層断面 (15S 杭) S→N



土層断面 (16S 杭) W→E



土層断面 (17N 杭) S→N



土層断面 (H19 杭) W→E

包含層残存状況確認調査



包含層残存状況確認調査完了状況 俯瞰



調査完了状況 俯瞰



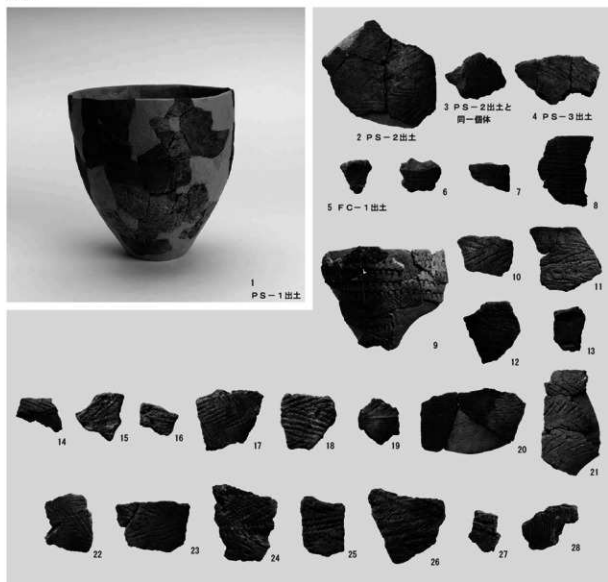
調査完了状況 NW → SE



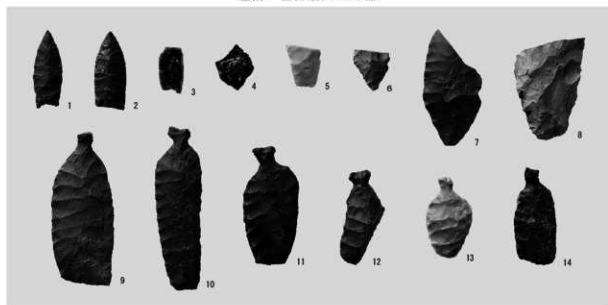
遺物水洗作業

調査完了状況と一次整理作業

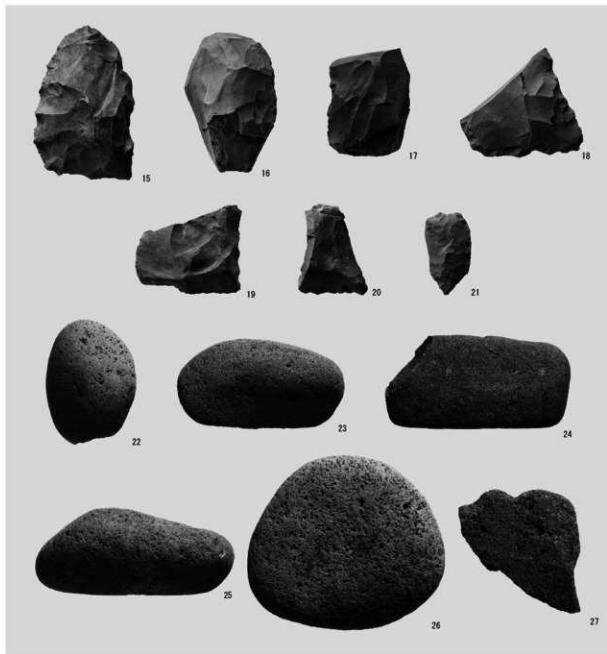
図版 8



遺構・包含層出土土器



遺構・包含層出土石器(1)



遺構・包含層出土石器（2）



黒曜石原産地分析試料

引用参考文献

団体・組織刊行物

- 長万部町 1977 『長万部町史』
国語小字交開校百周年記念協賛会 2000 『国語小字』開校百周年記念誌
ベドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック』博友社
北海道 1969 『新北海道史』第七巻史料一「津軽一統志」巻第十
北海道教育庁社会教育課 1967 『北海道遺跡埋蔵文化財包蔵地一覧』昭和42年3月
北海道教育委員会 1983 『北海道のチャーン』

長万部町教育委員会 埋蔵文化財調査報告書

- 長万部町教育委員会 1985 『史跡 東蝦夷地南部部藩陣跡ヲシヤマンベ陣跡』昭和59年度発掘調査事業報告書
長万部町教育委員会 1995 『オハルベツ2遺跡 栄原2遺跡 ナイベコシナイ2遺跡』平成6年度 縦貫自動車道長万部町埋蔵文化財発掘調査概要報告書
長万部町教育委員会 1996 『オハルベツ2遺跡 栄原2遺跡』平成7年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集
長万部町教育委員会 1997 『オハルベツ2遺跡 栄原2遺跡』平成8年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集
長万部町教育委員会 1998 『オハルベツ2遺跡』平成9年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集
長万部町教育委員会 1996 『ナイベコシナイ2遺跡』長万部町埋蔵文化財調査報告
北海道縦貫自動車道(虻田～長万部)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長万部町教育委員会 1997 『栄原2遺跡(1)』長万部町埋蔵文化財調査報告2
北海道縦貫自動車道(虻田～長万部)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長万部町教育委員会 1999 『オハルベツ3遺跡 オハルベツ4遺跡』長万部町埋蔵文化財調査報告3
道営農林業用揮発油稅財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長万部町教育委員会 2000 『富野6遺跡 富野7遺跡』長万部町埋蔵文化財調査報告4
北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長万部町教育委員会 2000 『共立遺跡』長万部町埋蔵文化財調査報告5
北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長万部町教育委員会 2001 『オハルベツ2遺跡(1)』長万部町埋蔵文化財調査報告6
北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長万部町教育委員会 2002 『栄原2遺跡(2)』長万部町埋蔵文化財調査報告7
北海道縦貫自動車道(虻田～長万部)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長万部町教育委員会 2002 『オハルベツ2遺跡(2)』旧石器編 長万部町埋蔵文化財調査報告8
北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

北海道文化財保護協会 埋蔵文化財発掘調査報告書

- 北海道文化財保護協会 1999 『長万部町 オハルベツ2遺跡』北海道文化財保護協会調査報告書第11集
北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
北海道文化財保護協会 1999 『長万部町 富野5遺跡』北海道文化財保護協会調査報告書第12集
北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
北海道文化財保護協会 2000 『長万部町 オハルベツ2遺跡(2)』北海道文化財保護協会調査報告書第13集
北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
北海道文化財保護協会 2000 『夕張・千歳・長万部 5年間の発掘調査の記録』

市町村町教育委員会 埋蔵文化財調査報告書

- 今金町教育委員会 1991 『美利河3砂金採掘跡』
一般道道島牧美利河線今金町茶屋川改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 今金町文化財調査報告3
今金町教育委員会 2009 『宮島1砂金採掘跡』
一般国道230号今金町国線道路工事に伴う発掘調査報告書 今金町文化財調査報告6

論文・書籍等

- 石井正夫 1983 「国語小字の地質」地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 札幌(4)第59号
通商産業省工業技術院 地質調査所
宇田川洋 2005 『増補改訂』アイヌ伝承と器』北方新書007 北海道出版企画センター
大井晴夫 1992 「『シヤクシャインの乱(寛文九年蝦夷の乱)』の再検討」北方文化研究第21号

- 大場利夫・田川賢蔵 1955 『静狩遺跡』北海道山越郡長万部町
 大久保雅弘・藤田至則 1984 『地学ハンドブック・新訂版』築地書館
 小山正忠・竹原秀雄 2011 『新版 標準土色帳』34版 日本色研事業株式会社
 菅江真澄(内田武志・宮本常一編訳) 1966 『えぞのてふり』『菅江真澄遺著記2』東洋文庫 68 平凡社
 高倉新一郎編 1969 『日本庶民生活史料集成』第四巻 探検・紀行・地誌(北辺篇)
 松宮観山『蝦夷談筆記』下(394～400頁)
 『蝦夷録記』(「渋谷利観夷録誌に付し録書」の写し)(639～650頁)
 則田安右衛門『寛文十年秋蜂起集書』(651～677頁)
 松浦武四郎(高倉新一郎校訂 秋葉実解説) 1982 『丁巳 東西蝦夷山川地理取調日記』下 北海道出版企画センター
 「報登字式522津 日誌 巻の一 巻の二」丁巳 第二十一巻・第二十二巻(はとうしへつにっし)
 山本慎一 1993 『北海道文化財保護あれこれ』北海道図書企画
 山本慎一 1993 『北海道文化財関係年表(付関係資料)』『北海道文化財保護あれこれ別冊』北海道図書企画

北海道埋蔵文化財センター 刊行物

- (財)北海道埋蔵文化財センター 1985 『今金町 美利河1遺跡』
 美利河ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 23
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1989 『今金町 美利河1・2砂金採掘跡』
 後志利別川水系美利河ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 59
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『豊浦町 高岡1遺跡』
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 88
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『豊浦町 高岡2遺跡(2)』
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 91
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『豊浦町 高岡1遺跡(3)・高岡2遺跡』
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 106
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『豊浦町 東雲遺跡』
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 107
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 『長万部町 富野3遺跡』
 北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 131
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2000 『長万部町 花岡2遺跡・花岡3遺跡』
 北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 139
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2000 『長万部町 豊野6遺跡』
 北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報 143
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2020 『テュクタ 45』
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2021 『調査年報 33』令和2年度
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2024 『調査年報 36』令和5年度

北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書

- (財)北海道埋蔵文化財センター 2011 『木古内町 木古内2遺跡』 北理調報 278
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2011 『木古内町 大平遺跡 大平4遺跡』 北理調報 280
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2012 『木古内町 鮎内2遺跡』 北理調報 281
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2012 『木古内町 大平4遺跡(2) 鮎内2遺跡(2)』 北理調報 292
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2013 『木古内町 木古内2遺跡(2)』 北理調報 293
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2014 『木古内町 木古内遺跡』 北理調報 304
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 『北斗市 押上1遺跡』 北理調報 312
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 『木古内町 新道4遺跡(4)』 北理調報 320
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016 『木古内町 大平遺跡(2)』 北理調報 321
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 『木古内町 大平遺跡(3)』 北理調報 328
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 『福島町 鉾崎遺跡』 北理調報 333
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 『知内町 湯の里遺跡(2)』 北理調報 334

北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2021 『長万部町 共立2遺跡・豊野4遺跡』 北理調報 366

報告書抄録

ふりがな	おしやまんべちょう とよの3いせき								
書名	長万部町 豊野3遺跡								
副書名	北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(長万部町道国縫川向線)								
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北理調報)								
シリーズ番号	第378集								
編著者名	末光正卓・吉田裕吏洋								
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター								
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 Tn011-386-3231								
発行年月日	西暦2024年3月27日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
豊野3遺跡	北海道山越郡長万部町豊野123-1、124	01 347	B-17 -15	E-12 基御杭(グリッド杭)	42度 26分 02.0秒	140度 18分 48.0秒	20230508 ～ 20230630	300 ㎡	北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(長万部町道国縫川向線)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
豊野3遺跡	遺物包含地	縄文時代早期	土器集中 フレイク集中	縄文土器(東剣路IV式) 石織、つまみ付きナイフ、スクレイパー			赤井川産の黒曜石		
要約	<p>豊野3遺跡は、国縫川の右岸の国縫墓地に位置する。主たる時期は縄文時代早期後半で、同時期の遺物集中を確認した。土器集中からは東剣路式系土器、フレイク集中からは頁岩製のフレイクが出土した。土器はこの他にI群a類の沈線文土器、II群b類の円筒土器下層式が少量あり、定型的な石器は、石織、石槍・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、たたき石、すり石、台石がみつかった。また、国縫川河口付近は、寛文九年蝦夷の乱のシャクシャイン古戦場として知られている。</p>								

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第378集

長万部町 豊野3遺跡

—北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(長万部町道国縫川向線)—
令和6(2024)年 3月27日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238
[URL] <http://www.domaibun.or.jp>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp

印刷 岩橋印刷株式会社
〒063-8580 札幌市西区西町南18丁目1番34号
TEL (011)669-2530 FAX (011)671-5551